

月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.21

エリィとあの人物の意外な出会いが語られる!?
英雄伝説 零の軌跡 ショートストーリーズ

ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

Falcom FanArt Collection

巻頭特集
小説『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』
作家・むらさきゆきや インタビュー

グロリアスで両雄がついに衝突!
空の軌跡外伝 レーヴェ物語

Wアリオス、樹海にて邂逅す!?
みんな集まれ ファルコム学園!

『空の軌跡 FC』編がついに完結!

英雄伝説 空の軌跡 ～リベール王国スナップショット～



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

ファルコムロングインタビュー

小説『英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を』

作家・むらさきゆきやインタビュー

本誌のVol.13より、『零の軌跡』の主人公・ロイドたち特務支援課を主人公とした、本編とはひと味違う楽しさを味わうことができる小説『午後の紅茶にお砂糖を』を連載し、今年は日本ファルコムの新作『那由多の軌跡』、『イース セルセタの樹海』では限定版ドラマCDのシナリオも手がけた小説家・むらさきゆきや先生に、ファルコムとの出会い、そしてその魅力について伺ってみたぞ！



――ファルコムマガジンで小説を連載されることになった経緯を教えてください。

むらさきゆきや（以降、むらさき。敬称略）：ファルコムマガジンで連載されている田沢大典先生から、ファルコムさんを紹介していただきました。

すでに『零の軌跡』については本編やメインストーリーにまつわるエピソードはノベライズが進んでおり、私の企画は最初は『サブキャラクターを中心とした話』ということでしたね。

しかし、むらさき「支援課メンバーの出てこない零の軌跡ですか？　単行本になったときの表紙、キリカさん？　シズクちゃん？　むしろ、ヴァルドさん？」

担当さん「ちょっとマニアックですよね……（汗）」

というやり取りがあって、『支援課のサブエピソード』という企画に落ち着きました。

――『午後の紅茶にお砂糖を』はひと言でいうと、どのようなお話でしょうか。また、どのようにして生まれましたか？

むらさき：私の書いてる『午後の紅茶にお砂糖を』は、英雄の休日を描いた話です。



サブエピソードというのは、あまり重要な設定に関わらないものがいいんですね。そういう深い話はゲーム本編でやったほうがいいんです。かといって、過去エピソードは、もう田沢先生のノベライズがありましたから。

差別化のために、『紅茶』では、支援課メンバーの日常を描いてキャラクターを掘り下げることに専念しています。

世界の危機を書いてるときに、デートしてる主人公たちは出せないですからね（笑）。

ゆるく、笑えるようにやってます。

例えば、1話はロイドとティオがミシュラムに遊びに行く話にしています。ただ、他のキャラクターたちも黙って待ってたりはしないわけですね。黙って見てたり（尾行）とか。

2話はエリィが仔猫の面倒を見ることになってみたり。

個人的には6話が気に入ってて、あれは『碧の軌跡』のクライマックスのロイドのセリフをモチーフにしてます。読者の方は、わかりましたかね？　そして、キーアのふわふわ感を出すために、過去形を使わないようにしてたりします。

――制作するにあたり、『零の軌跡』『碧の軌跡』はプレイされましたか？　また、プレイした感想をお聞かせください。印象に残ったキャラクターやシーンはありますか？

むらさき：もちろんプレイしていましたよ。やってみて、まずボリュームが衝撃的でしたね。

私はゲームのプログラマーをやってたことがあり、3D格闘ゲームとかRPGを作ってたんですね。工数の管理なんかもしたことあるんで、これだけ大規模なゲームを作る労力が、なんとなく想像できるんです。だから、ものすごい熱意とパワーに驚きました。

印象に残ったキャラクターは、ヨアヒム・ギュンターですね。他人とは思えません………冗談です。

印象に残ったシーンは、ちょっとネタバレになっちゃうんですが――

ラスト直前でロイドとふたりきりでおしゃべりする約束をするじゃありませんか。あのシーンで、ほとんどのヒロインたちと約束してもらえなくて……あとで調べたら、プレゼントしてないと好感度が上がらないんですね！　やっぱり、モテるには甲斐性がないとダメです。正義感だけじゃダメなんや！　と現実を知った気がしました。

――引き続き、制作するにあたり、ファルコムとはどのようなお話をされましたか？

むらさき：近藤社長と直々にネタ



出しの相談ができました。すごいですよね。

　大きな会社なのにフレンドリーだし、作品に対してすごく熱意を感じました。こういうところがユーザーに親しまれる所以かな、と思います。

　とくに盛り上がったフランのエピソードは、次に書く予定なので、よろしくお願いします。がんばります。

——すでに本誌で7話連載されていますが、ファンから何かリアクションはありましたか？

むらさき：私の個人サイトから感想をいただいたり、ブログに書いてもらったりしていますね。

　暖かい応援メッセージを読んで、いつも励まされています。

　お客さんが目の前にいる仕事ではないので、そういうリアクションをもらえるのは、とてもうれしいです。

——『那由多の軌跡』、『イース セルセタの樹海』のドラマCDのシナリオを手がけられましたが、どのようなコンセプトで書かれたのでしょうか。また、ほかにも制作する際に心がけた点はありますか？

むらさき：このドラマCDは、ゲームの特典としてつくものなんですね。製品とは別に後から出るグッズではないわけで。

　ですから、気をつけたのは、「本当にいいシーンは、ゲーム本編で楽しんでもらう」ということです。

　ネタバレをしないようにするだけでなく、『聴いておくとゲームがより楽しめる』というのを目指しました。

　あとは、ドラマCDは、絵も地の文もないメディアなので、それでも状況が理解できるようにセリフ回しは気を遣っています。ナレーションは説明のためでなく、テンポを上げたり、盛り上げるために使ったり。

　苦労話としては——

　『那由多の軌跡』は、メインヒロインがなかなかしゃべってくれなくて。

　その次の『イース セルセタの樹海』では、主人公までしゃべってくれなくて（苦笑）。

　ドラマCDのアドルのセリフは、全部、近藤社長から直々にOKをいただいております。

——収録にも立ちあわれたとのことですが、その感想をお聞かせください。

むらさき：（自主規制）さんが、ちいちゃくてかわいかったです！

　……そういうことじゃないですか。すみません。

　収録の前に、「このときのキャラクターの気持ちは、こうですか？　別のキャラへの感情はこうですか？」と質問をいただきまして、その掘り下げの深さに、驚きました。そして、説明した感情が、ちゃんとセリフに込められてると感じられて……すごかったです。

　あとは——

　うちの担当さんが、ファルコムマガジンの編集をされてるわけですが、私へのドラマCDの資料出しや脚本の受け取りや、声優事務所とのスケジュール調整や、声優さんへのインタビューや、その記事の書き起こしや、イベントの裏方やら色々やってて、そのうち倒れるんじゃないかと思いました（笑）。

——今後の展望についてお聞かせください。

むらさき：11月16日に『午後の紅茶にお砂糖を』の単行本が刊行されます。よろしくお願いします。

　11月16日に『午後の紅茶にお砂糖を』の単行本が刊行されます。よろしくお願いします。

　大切なことなので2回言いました。

　これの人気しだいで「今後の展望」は変わります（笑）。

　今のところ——来月かその次の月に、先ほど書いたネタが載せられれば、と思っています。

　後のことは決まっていないですね。

　よろしくお願いします！

——最後に、ファンのみなさんにメッセージをお願いします。

むらさき：11月16日に『午後の紅茶にお砂糖を』の単行本が——あ、他のことですか。

　ファンのみなさんに、と言われましても、私も「ファルコム作品のファン」ですから、気持ち的にはユーザー側なんですよね。

　私も『碧の軌跡』の続きとなる軌跡シリーズをずっと待ってます。

　ドラマCDの収録のあと、「次は帝国編ですか⁉」って社長に訊いたら、（削除）

　……やばい、消される（汗）。

　とにかく、いろいろありますが、今、こうして大作RPGシリーズをリアルタイムで楽しめるってことが、すごく貴重だし、幸せなことだと思います。

　娯楽は楽しんだもん勝ちですからね。

　待つのも楽しみのうちだと思ってます。

　なんか、本当にファンのコメントになってしまった（笑）。

　それでは私の連載を読んでくださっている読者の方へ——これからも、いちファンの立場からノベライズを書いていきますので、応援よろしくお願いします！

　今日はありがとうございました！

プロフィール

むらさきゆきや

作家・シナリオライター。

代表作は『覇剣の皇姫アルティーナ』（ファミ通文庫）、『ゆうれいなんか見えない！』（GA文庫）など。ゲームやドラマCDのシナリオも手がける。



英雄伝説 空の軌跡 ～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

第6回『笑顔の理由』

1.

焼きつけた写真が幾つもの山となって積み重なる机の空きに肘をつき、手のひらに顎を乗せながら、リベール通信社カメラマンのドロシー・ハイアットは、ぼんやりと天井の染みを数えていた。

ああ、あの染みの形はエルベ離宮に突入した特務飛行艇にそっくりです……。

「なあに、ぼんやりしてやがる」

声とともに、ドロシーの後ろ頭を良い音を立ててはたく者がいる。

振り向いて確かめるまでもなかった。

「痛いですよぅ」

ナイアル先輩、と言いながら、ドロシーは結局のところ振り返った。にやりと浮かべた笑みまで想像したとおりの顔がそこにあった。

「ぼうっとしてんじゃねえ。仕事はどうした」

「おやすみです」

「ほう？」

ナイアル先輩が顔を編集室の奥で座る男――編集長へと向ける。

「うちに、仕事をしない記者を雇っておくだけの甲斐性ってありましたかねぇ」

「そうは言うがね、ナイアル君。仕方がないんだよ」

「そうそうしかたないんです～」

「何がだよ」

「ポチ君がおやすみのときは、わたしもおやすみなんですよぅ」

「……カメラ、どうした？」

「オーバーホール中です～」

すかさず編集長が口を挟む。

「オーバルカメラだけにね！」

「……」

「……」

「えっ。あれ？　どうしたんだ、ナイアル君、ドロシー君」

「……」

「……」

「なんでそんなやっちまったなって顔を君たちはしてるんだ。つまりこれは、オーバルカメラとオーバーホールをかけたっていうだね――」

「すんません、編集長。ギャグの説明をさせるっていう苦行をさせちまって……」

「先輩、そこで謝るのはさらにコクですよぅ」

「君たち……そんなに給料が減ったほうがうれしいのかね」

じと目で睨まれて、ドロシーとナイアルはそそくさと自分の机に向き直った。

ふたたび手のひらの上に顎を乗せつつ、ドロシーは天井を見上げる。はあ、とため息をついた。

ヒマです……。

「おいこら」

「ほにゃ……？」

視線だけ動かして隣を見ると、おっかない先輩が顔を机の上の書類に向けたままで声をかけてきていた。

「でかいヤマが終わったばかりだからって、呆けてるんじゃねえぞ、こら」

「いえそんなことは――」

――あるかもしれない。

リベール通信社の本部がある王都グランセルは、つい先日にクーデター騒ぎがあったばかりだった。情報部の一部によって画策された用意周到なその反乱は、遊撃士と呼ばれる人々の活躍により阻止され、首謀者であるリシャール大佐の逮捕をもって幕を閉じている。

囚われていた女王と姫殿下も救出され、陰謀は潰え……。

女王生誕祭の裏側で何が起こっていたかを市井の人々が知ったのは、リベール通信社が第一報として特別号を発行してからだった。

その後も事件を大きく報じ続けたリベール通信は売れに売れた。

　トップ記事をものにしたのは、今回のクーデター事件を最初の最初から追っていたナイアル・バーンズ——つまり、ドロシーの横に座っているおっかない先輩だ。記事の内容は市民から驚きとともに高く評価されている。

　その連載も終わり、今はいつものリベール通信に戻っている。

　世はなべてこともなし。

　だからこそ、この機会にとドロシーは愛用のカメラをメンテナンスに出したのだし。

　工房からは今日の夕方にならないと渡せないと言われている。

「代用カメラくらいもらってきてんじゃねえのか」

「それがですねぇ」

　ドロシーはようやく肘を机の上から下ろした。脇に置いていたそれを取り上げる。

「この子では、さすがにお仕事には向かないかと」

　ドロシーは手のひらの上に置いたそれをナイアルのほうへと見せる。

　書類を読むふりをしていたナイアルが顔を向けた。

「えらく小さなカメラだな」

　ドロシーの手の上に乗ってしまうのだから、確かに大きくはない。ポチ君に比べると、三割ほど大きさを削った感じだった。

「代用カメラが出払ってまして、これを渡されました」

「ほう」

　こんなことならカメラの全部をオーバーホールに出すのではなかった、と悔やまないでもない。

「今度出る新製品らしいです。『誰にでも綺麗に写せる』が合言葉で、ええとつまり、いっぱんふきゅー用ってやつですか」

「ほう。いいじゃねえか。何が問題なんだよ」

「『ちび君』は望遠も接写もできないんですよー。広角にレンズを替えることもできませんし、感光クオーツに記録できる枚数も十分の一なので。これだと、いちばんきれいな表情で撮ってあげられないかも……」

「……ちび君？」

「あ、この子の名前です〜。小さいからちび君！」

「……」

「あれ？　どーしたんですか、ナイアル先輩」

「なあ、ナイアル君。わたしばかりセンスを責められるのは納得がいかないのだが」

　編集長がすかさず、というタイミングで言葉を挟んできた。

　ドロシーにはさっぱりわからない理屈だけれど。

「えっ。なんでですか。だって、ギャグじゃないですよ？」

　そう返したらすっごく怒られた。

　呆れたナイアル先輩に、編集長の怒りが納まるまで、もう今日は仕事しなくていいから散歩にでも行ってろと追い出されてしまい。

　そのおかげで、とある依頼を受けることになったのだ。

2.

　編集部の入っている建物を出て大通りへ。

　居酒屋《サニーベル・イン》を右に曲がって、東街区を目指した。

　目的地は《エーデル百貨店》。

　百貨の名に恥じず、米や味噌のような生活必需品から高級アクセサリまで幅広く売っている。ドロシーの薄給では金銀細工など手が出ないけれど、見るだけでも楽しいし、安くて美味しいお菓子もいっぱい並んでいる。

　共和国大使館と向かい合っている南口まで辿りついた。

　百貨店へと向かおうとしたところで声を掛けられた。振り向いて、意外な人物に目を丸くする。

「あのぉ」

　おそるおそるといった様子で声をかけてきたのは大使館の門番だったのだ。

「はい。なんでしょう？」

「ウッス。姐さん、お疲れさまッス」

「あ、姐さん!?」

　そんな呼ばれ方は初めてだ。

　姐御!?

「ウイッス！　あ、姐御のほうがいいッスか」

「姐さんでお願いします〜」

「あのぉ、リベール通信社のカメラマンの方ッスよね？」

「あ、はい」

　ドロシーは驚いてしまった。自分はそんなに有名だったろうか。記名記事を書いているナイアル先輩ならば、わからないでもないのだが。

「ちょっとお時間よろしいッスか？」

「はあ」

「リベール通信の武術大会の写真を見たッス」

「ああ……」

　なるほど、とドロシーは納得してしまう。

　女王生誕祭の前に行われた武術大会を撮ったドロシーの写真は、けっこうな枚数を紙面に載せることができたのだ。クーデター騒ぎの起こる前で、そこここに不穏な前兆はあったものの、全体的にはリベール王国は平和だった。

　今年は変則的な大会だったために、逆に市民の好奇心は

煽ったらしいし。

　この兵士はおそらく武術大会に興味があって――でも、大会の記事ってカメラマンの名前まで載っていたかな？

「いつもリベール通信社のほうから大きなカメラをもって、この通りの前を走っているッスよね。走ってる回数と転んでいる回数が同じくらいッスけど」

　ドロシーの頬が熱くなった。

――そ、そんなに転んでないですよぅ！

「あ、いえ。……はい」

「で、ジンさんの写真、余ってないスか」

「は？」

「ジン・ヴァセックさんッス」

「あの、遊撃士の？」

「はい！　おれ、あのひとのファンなんッス。すっげぇ強いのに、すっげぇ優しいッス！」

「ああ、はい。確かに……」

　ドロシーもそれは知っている。

　あの大柄な遊撃士の青年は、相手が魔獣であろうとも、意気投合したら命を賭して助けてしまうくらいには優しい。

　つまり、そうとう気合の入った優しさをもっているということだ。

　そうかとドロシーは思い当たる。この人は東方の共和国の大使館の門番だ。ということは、ジンさんが王都に滞在していた間は何度も会っているはずだ。

「おれ、武術大会を見に行けなかったッス。強いとは思ってたけど、まさか優勝するなんて……見に行けなくって、すっげぇ悔しいッス」

「それで写真を？」

「ウッス！　新聞に載ったやつでいいッス。いただけないッスか。家に飾って、励みにしたいんスよ！　おれも、いつかあんな風にカッコイイ男になりたいッス！」

「え～」

　それは難しいんじゃなかろうか、とドロシーは思った。

《不動のジン》といえば――ナイアル先輩によれば――出身の東方だけでなく、リベール王国にまで名を知られた遊撃士だ。熊のごとき体格を持つ偉丈夫で、己の身を武器として戦う稀代の格闘家なのだ。

　チーム戦の武術大会なのに、たったひとりで参加し、予選を勝ち抜いた男。

　あの遊撃士コンビのエステルとヨシュアを加えた本戦では優勝までしてしまった。

「それにはよっぽどたくさん食べないと～」

「体格の話じゃないッス。心意気ッス！」

「あ～」

　ですよねー。

「なので、どうしても一枚でいいから欲しいんスよ。お願いするッス！　リベール通信の写真、見たッス！　あの構図、あの迫力、最高だったッス」

　ドロシーは困ってしまった。

　自分の写真を誉められるのはうれしいし、確かにジンを写した写真はある。

　何枚もある。

　紙面に一枚の写真を載せるためには、その裏でたくさんの没が出るものなのだ。よく撮れていても、記事に割かれたスペースの都合や、テーマに合わなかったり、似たような写真が多かったりすると使えない。

　それどころか、そもそも感光クオーツは残っているから、もういちど焼きつければ紙面を飾った写真を印刷することも可能ではある。

「でも……あの、そういうことはあまりしてなくて、ですねー」

　武術大会の写真に限れば事前に会社から参加者に写真の公開許可を取ってあるので、盗み撮りを捌くような真似にはならない。とはいえ……。ここでOKしてしまうと、際限なく頼まれてしまいそうな気もする。

「そ、そうッスか……」

「あ、あの」

　がっくりとうなだれられてドロシーはつい同情してしまった。なんとかならないだろうかと思考を巡らせ、ふと思いつく――そうだ！

　ドロシーは腰のポシェットから一枚のポストカードを取り出した。

「代わりに、これでどうでしょう？」

「おお⁉　こ、これはすげえええ！　イカスッス！　最高ッス！」

　それは、《不動のジン》が魔獣と戦っている写真をポストカードにしたものだった。

　天をつくような大きな魔獣を相手に対峙しているジンが映っている。

　つい最近にとある温泉旅館の女将さんに土産物として作成を依頼されたものだ。見本として刷りだしたものの一枚だが、これならば配ることに問題はない。

　そもそも配布用のものなのだし。

「いただけるッスか？」

「はい～。それでよろしければ～」

「ウッス！　姐さん！　商売おつかれさまッス！」

「いえ別に商売ではないのですが」

――そこは素直にありがとうだけで良かったですよ～。

　まあ、喜んでもらえてなによりだ。そう思って立ち去ろう

としたときだ。

「これは確かにいい写真だな～。お姉さんが写したの？」

門番の声とは別の声で言われた。

ドロシーは振り返る。

門番が見入っている写真を肩越しから覗きこんでいる青年がいた。

青年が顔をあげる。

「やあ、僕、アントンっていうんだ」

「はい～？」

「ねえ、お姉さんの名前は？　もしかしてカメラマン？」

門番の背後からドロシーの前までやってきて尋ねてきた。

「ドロシー・ハイアット、はい、リベール通信に勤めております～」

ひととおり答えてから、改めて目の前の青年を見つめる。

明るい茶色の髪と、なにやら思いつめたようにも見える少し寂しそうな瞳をしていた。思いつめたというか思い込みの激しそうなというか。

ひとことで言えば、厄介ごとを持ってきそうなというか……。

アントンが口を開いた。

「ねえ。僕も一枚、写真を頼んでいいかな？」

3.

「ええと、アントンさん。なぜ、わたしたちはこのような真似を？」

ドロシーとアントンは腰を屈めて百貨店前の植え込みに隠れている。

「もうすぐだよ」

「もうすぐ？」

「来た！」

誰がですか、と聞く前に、ドロシーの視界の隅にひとりの女の子の姿が映る。

慌てて頭を下げた。

見つかったらどう言い訳しよう。心臓がドキドキしてきた──なんで、こんなことに！

通り過ぎる彼女は、隠れているドロシーたちに気づくことなく、植え込みの前を歩いて、百貨店の南口を西へと向かって歩き去った。

ほうっとドロシーは安堵の息を吐く。

彼女の背中が小さくなってから、アントンが植え込みの陰から立ち上がった。釣られるようにしてドロシーも立った。

「あのひとの名はメーシャ」

「は？」

「メーシャっていうんだ。いい名前でしょ」

「あ、はい。そうですね」

「可愛いでしょ？」

「あー……」

見えたのは主に後ろ姿でしたので。

──ひょっとしてアントンさんの彼女さんとかでしょうか。となると、いっぱい誉めておいたほうが喜ぶのかもしれない。

「ええと、その──確かにかわ……」

「振られちゃったんだよね、僕……」

言わなくてよかったあああ！

「そ、そうでしたか」

アントンがうな垂れていた。両の肩も下がってしまい、まるでドロシーが叱りつけたかのようだ。

「僕、この街を出ることにしたんだ」

「そ、そうですか」

「そう！　新しい恋を探すのさ！」

「はあ」

「僕、毎日彼女を見つめていて、ドキドキしていたんだ」

──ドキドキ……ええ、わたしも確かにしました。見つかりはしないかと。

「心が高鳴るっていうのかな？　僕、彼女の笑顔が大好きだったんだよなぁ。この百貨店の前ですれちがったときは、必ずラッキーなことが起こったし。運命だと思ってたんだけど」

「らっきーですか」

「とれたて卵の黄身がふたつだったり」

「あー、ありますよね～。双子の卵」

「新鮮ミルクが本当に新鮮だったり！」

「新鮮じゃないと売れない気がします」

「泥つきニンジンにちゃんと泥がついていたり！」

「それラッキーなんでしょうか……」

ドロシーの言葉はアントンの耳には届いていないようだった。

「仕事も見つからず、何もしないまま一日を終えてしまった。そんな風に落ち込むばかりだった僕の生活を、メーシャは明るくしてくれていたんだ。まあ、結局、仕事は見つからなかったんだけど……」

「そ、それは……」

何と言って慰めていいのやら。

アントンの言葉からドロシーが理解した限りでは、彼はどうやらこの王都で仕事を探していたらしい。だが、女王生誕祭で常とは違う業務に忙しく追われていた街の人々は彼の相

談に乗ることができなかったようだ。

「そこで、お姉さんの出番なんだ！」

「えっ？　わたしですか？」

「うん。僕、メーシャの笑顔を忘れたくないんだ。少なくとも新しい恋の相手を僕が見つけるまでは。でも、心の奥底にどんなに深く焼きつけたつもりの記憶だろうと、時の流れには勝てないのさ」

アントンの言葉に、かつて先輩記者の言った台詞が頭を過ぎった。

記憶の中の思い出はいつか色あせるものだ、と。

「歳月という名の雪が、楽しかったり辛かったりした思い出という名の大地を、最後には覆い隠してしまうんだよ」

「し、詩人さんなんですね」

「だって、恋しているから！」

……振られたのでは？　とはさすがに突っ込めない。ドロシーにもそれくらいの機転は利いた。辛うじてだが。

「お姉さん。僕、彼女の笑顔の写真が欲しいんだ」

「笑顔……の？」

「うん。さっきの門番に見せていた写真を見て思ったんだ。あの大男を撮った写真は彼のカッコよさを充分に写し取っていた、ってね」

「そ、それほどでも～」

「彼女の笑顔を写し取ったあんな写真があれば、僕は新しい街でもきっと頑張れると思う！」

きらきらした瞳で見つめられてしまい、ドロシーは断るための言葉を咄嗟に思いつくことができなかったのだ。

心の中でだらだらと冷や汗が垂れている。

――なんだかとってもまずい話の流れになっている気がしますよぅ！

それに……とドロシーは思ってしまったのだ。

もしここで断ったら、次の街でも彼の仕事は見つからないかもしれない。

なんといっても彼はさきほどメーシャとすれちがっている。

つまり、ラッキー状態にあるはずで、ここでドロシーが断ったら、アントンのジンクスを信じる心もぺちゃんこに潰れてしまいそう。

落ち込んだ気分のままグランセルを旅立つことになるわけで……。

「わ、わかりました。なんとかできるかどうか……少し考えさせてください」

そう返すのが精一杯だった。

4.

夕方に百貨店前で再会することを約束して、ドロシーはアントンと別れた。

ひとりきりになって、ドロシーは考える。

さて――どうしたもんでしょう。

アントンによれば、メーシャは一日に何度も百貨店の周りを散歩しているらしいから、カメラに収めるだけならば難しいことではないだろう。

ただ、それでは盗み撮りみたいになってしまう。

ジンさんの武術大会の写真は撮影の許可を得ていたし、そもそも公開されている姿であってプライベートではない。

ポストカードは本人に断ってある。

メーシャの場合はそれらのいずれとも違う。

それに、とドロシーはもうひとつ別の問題があることに気づいていた。

ドロシー・ハイアットには周りの風景の表情が見えた。

空や月や星や建物が泣いたり笑ったりしているのがわかるのだ。

けれども、どうやら他の人々には、彼らの表情が見えないらしい。

「みんなも同じだと思っていたんですけれどねー」

問わず語りになってひとりごちてしまった。

自分自身で思っているところでは、ドロシーは目の前に存在する風景たちの数多の表情を切り取っているに過ぎない。

裏を返せば、ある表情を撮りたいと思って撮影したことはない。あるものをあるがままに切り抜くのがドロシーの写真だった。

スナップショット。

写す対象を、自然にそのまま素早く切り取った写真をそう呼ぶのだけれど、ドロシーは自分の写真をスナップショットみたいだと思っていた。

報道機関であるリベール通信社に籍を置いているのもむべなるかな。

ということで、だ。ある特定の表情を写して欲しいと依頼されたことはないし、そういう目で対象を見たこともない。

「笑顔……ですか」

ひとはどういうときに笑顔になるのだろう。

あのメーシャという女の人はどうすれば笑顔になってくれるのだろう。

「困りました……」

うぅむ、と頭をひねっても何も浮かばない。考え続けていたら、熱が出てきた。

こういう頭を使うお仕事はナイアル先輩向きであって自分向きではない。ドロシーはそう思う。

「これは……ムリです！」
ちび君を抱えたままドロシーは歩き出した。
仕方ない。いつものようにとりあえず街をあちこち歩いてみよう。お気に入りの風景を写しているうちに何か思いつくかもしれない。
百貨店から帝国大使館のほうへと歩きだす。
公園の屋台に寄って冷やかしつつ、帝国大使館前を西に折れる。大通りに出て、右に曲がればグランセル城だ。左に曲がれば遊撃士協会の支部がある。
太陽は中天にあり、足下に小さな影を落としていた。見上げれば青い空。白い雲がひとつふたつぽっかりと浮かんでいる。
「ご機嫌よろしいですねー」
雲に向かってちび君を構えてボタンを押し込む。レンズと感光クオーツを隔てるシャッターが一瞬だけ開いては閉じる軽やかな音を響かせて、ゆるんだ顔を浮かべた蒼空の表情が記録された。
手元側の投影板に写された景色を見て確認する。
「まあ、悪くないですよね」
ちび君の投影板はポチ君に比べると、少しだけ小さくて見づらいけれど、ドロシーが切り抜きたいと思った空の表情がそこにあった。
ピントを合わせる必要もなければ、絞りや露出や被写界深度を気にする必要もないので、楽ちんではある。物足りないとも言うが。
「うふふ……美人さんですよぅ」
写した風景に満足して、ドロシーはそのまま大通りを西へと渡る。
とりあえず目指したのはグランセル大聖堂だ。
王都に建てられただけあって、王国内にある七耀教会の聖堂ではもっとも大きい——たぶん。
心を落ち着けて何かを考えるには良い場所だ。
ゆっくりと周りの景色を楽しみながら歩いていく。
平日の仕事時間だから人通りは多くない。おかげで誰かにぶつかることもなく、何かに躓くこともなく、ドロシーは辿りついた。
両開きの大きな扉には鍵は掛かっていなかった。
大聖堂は「求める者すべてに開かれている」と常日頃から主張している。
泥棒が銀の燭台を盗み出そうともだ。
説教壇の前に何列にも並べられた横長の椅子のひとつに腰かける。ちょうど午後のお説教が始まるところだった。ゆったりとしたローブに身を包んだ司祭さまが登壇すると、座っていた人々のおしゃべりがぴたりと止んだ。

軽く笑みを浮かべ、空の女神（エイドス）の教えを語り始める。
朗々とした声の司祭さまだった。
聞いているだけで心が穏やかになって……眠くなってきた……。
肩を揺すられ気がついた。司祭さまも降壇しており、視線の先の説教壇も空っぽで、その奥にあるステンドグラスからは少し傾いた日差しが七つの色をまとって降り注いでいる。
「お疲れは取れましたかな？」
ドロシーを起こしてくれた手の持ち主が言った。
声に振り仰いではっとなる。ドロシーの脇に立っていたのは、さっきまでお説教をしていた司祭さまだった。
「う、あ、はい！　とても！」
正直にそう言うのが精一杯。そんなところで嘘をついてもしかたないし。
「それはよかった」
と、にっこり。
ドロシーの頬が熱くなった。
「ご、ごめんなさい～」
「よろしいのですよ。エイドスさまが休みなさいとおっしゃられていたのだと思います」
そう言って、ふたたび微笑む。
大切な説教の最中に寝てしまったのだ。怒っても当然。それなのにこの笑顔だ。
申し訳ないやら、恥ずかしいやら。
もういちどだけ謝ってから外に出た。
馴染みの喫茶店のほうへと向かいながらドロシーは考える。
司祭さまはどうして笑顔だったのだろう。怒りだしてもおかしくないはずなのに……。

5.

リベール通信社の入っている建物にもっとも近い喫茶店が、コーヒーハウス《バラル》だった。
この店の濃縮エスプレッソは目を覚ますのにちょうどいい。昼というには遅すぎるが、少しお腹も減ってきたところだからカレーでも食べようか……。そんなことを考えながら、ドロシーは店に入った。
昼食時ではなくなっていたけれど、代わりに午後のお茶の時間だった。
おかげで店内が混んでいる。
カウンターしか空いておらず、ドロシーはマスターの前の席に陣取った。
コーヒーを淹れるまでのわずかな時間、椅子の上で身体ご

と振り返って店の中を見渡す。景色を眺めることも好きだが、ドロシーは人間を見ることも嫌いではない。
とくに今は、人々の表情に関心がある。
窓際に陣取り、ずっと外の通りを眺めている青年がいる。なんとなくそわそわして落ち着かなさげ。店の時計を眺めては時々ため息をついていた。
奥の席では、運ばれてきた飲み物に手をつけず、本から目を離さない少女がいた。どうやら物語はクライマックスを迎えているらしくて、視線は真剣そのものだ。顔つきは息を呑んだような表情のままで固まっていて、今にも泣き出しそう。哀しい場面なのだろうか……。
その手前の席には、向かい合って座っている老夫婦がいた。なんだか喧嘩しているみたいだ。婦人のほうが怒った顔のまままそっぽを向いていた。夫のほうも意地張って胸の前で腕を組んだままむっつりとしている。
――いろんなひとがいるものですねー。
改めて思う。
色々な人がいるだけではない。それらの人々が一瞬たりとも同じ表情を浮かべていないのだ。
百万の顔に百万の表情が浮かぶ。
「笑顔、ですか……」
難題だった。
「どうぞ」
マスターの声に我に返る。
振り返ったとたんに、コーヒーの匂いが鼻をくすぐった。淹れ立ての濃縮エスプレッソが小さなカップに注がれて目の前に置かれていた。ありがとうと礼を言い、ソーサーから持ち上げたカップに口をつけたところで――吹きそうになった。
ドロシーの真横で突然にあがった赤ちゃんの大きな泣き声が鼓膜を叩いたのだ。
若い母親がカウンターに座り、赤ん坊をあやしている。思わず見つめてしまったドロシーに気づくと、すまなそうに頭を下げた。何か心に気のかかる事があるような、少し暗い表情をしている。
ほらほら、と赤ちゃんを揺すり、そっと胸元に抱き寄せる。そういえば、とドロシーは思い出した。赤ん坊というのは母親の心臓の音を聞くと安心するのだという。自分が母親のお腹の中にいたときを思い出すからだ、などと言う人もいる。
火のついたようだった泣き声が少しずつ収まってゆく。
わずかに安堵の表情を浮かべた母親がドロシーのほうへと顔を向けた。
「ごめんなさい。うるさくしてしまって」

「いえいえ」
カウンターの奥へと引っ込んでいたマスターがやってきて、母親に小さなメモを手渡した。
手にしたメモに目を走らせた母親の顔にうれしそうな表情が浮かぶ。
「よかった……」
マスターに向かって会釈をすると、母親はスツールから立ち上がった。顔にはようやく小さな笑みが浮かんでいて。「さあ、帰りますよ」と抱いた赤ん坊に声をかけた。
まだ言葉を解するような歳ではないが、母親の顔に釣られるように、赤ん坊のほうにも笑顔がはじけた。キャッキャという明るい笑い声が店内に木霊する。
天使の声のようだ。陳腐な喩えだけれど、ドロシーは素直にそう思った。
カランとドアベルを鳴らして母親と抱きかかえられた赤ん坊は店を出て行った。
「あの方のお家には導力通信機がないようでね。遠い地に住む病気だという母親の様子を連絡してもらうことになっていたんだが――」
マスターがドロシーに教えてくれた。
「――どうやら峠を越えて回復したらしいよ」
「そうでしたかー。よかったですよぅ」
「心配そうにしていたからね」
「えっ？」
「君がだよ、ドロシーさん」
「あ……はい」
だからわざわざ教えてくれたのか。
親子の背中が消えたドアを見つめていると、入れ替わるようにして息を切らせて駆け込んできた少女がひとり。まっすぐに窓際の席へと向かうと、何度も通りを見つめていたあの青年のところへ。
憂い顔が鮮やかな笑顔に変わる瞬間をドロシーは見てしまった。
「待った？」
「ちっとも」
晴れやかな顔のまま青年はそう応える。
時計を見るに、かれこれ一時間は経っていたと思うが、青年はそれをおくびにも出さなかった。まあ――彼にはお釣りがくるほどうれしいのだろう。そそくさと会計を済ませると、ふたりは連れ立って店を出て行った。
かちゃり、とカップとソーサーのぶつかる小さな音が聞こえた。
本を読んでいた少女だ。冷め切ってしまったコーヒーにようやく手が伸びたらしい。

小さな口許へとカップを運んでいる。
胸元に大切そうに読んでいた本を抱きかかえ、カップをソーサーに下ろしてから、大きくほうと息を吐いた。夢見るような瞳のまま、すこし上気した頬の少女は、満足げに微笑んだ。クライマックスを迎えた小説はどうやらハッピーエンドで終わったらしい。
いつのまにかその手前に座っていた老夫婦は仲直りしている。長い歳月をともに過ごした夫婦らしい落ち着いた笑みを浮かべたまま何事かを語り合っていた。
その瞬間、コーヒーハウス《バラル》には笑顔があふれていた。
「あ〜、そうでしたか〜……」
ドロシー・ハイアットは答えを見つけたのだ。
カウンターに向き直ると、さきほど口をつけずに飲み損ねていたカップを傾ける。
砂糖をたっぷりと入れたエスプレッソは苦かったけれどとても甘くもあって。
「美味しいですー」
思わず頬が緩む。
「それはよかった」
マスターが笑顔を返してくれた。

6.

日が西へと傾き夕映えが王都の街並みを包んでいる。白い煉瓦の道も空の色を照り返して赤く染まっていた。
《エーデル百貨店》の南口で待っていると、アントンがやってきた。
「どうだった？」
アントンは旅支度をしていた。ひょっとしたら、このまま次の街へと行くつもりなのかもしれない。
「ええと、その……」
「そうか、駄目だったんだ……」
「というかですね。あの〜」
ドロシーはポシェットから一枚の写真を取り出した。
「あ！」
メーシャの写真だった。
紅茶に溶かした蜂蜜のようなステキな笑顔を浮かべている。場所は、ココ——百貨店前だ。背後に《エーデル百貨店》の建物と看板が映っている。
「すごい！ これこそ、彼女の笑顔だよ！」
アントンが手を伸ばそうとしたが、ドロシーは写真を引っ込めた。
「あ……」

「これは違うんです」
ドロシーの言葉にアントンが不思議そうな顔をする。予想していたとはいえ、少し心が痛む。だが、この笑顔は違うのだ。
「実は、これはメーシャさんに直接お願いして撮らせてもらったものなんです。だから、お渡しできません。そういう約束ですので」
さすがに見知らぬ人間に渡すための写真を撮らせて欲しい、とは言えなかった。
「でも、せっかくそんなにかわいらしく映っているのに……」
アントンの顔に不満そうな表情が浮かぶ。
その顔にドロシーはちび君を向ける。すかさず写してから、カメラをひっくり返して手前の投影板をアントンに見せた。
ふくれっつらをしたアントンのスナップショット。
自分の不満顔を写されて、アントンが当惑したような顔になる。
「あの……怒らないで聞いてくださいね」
ドロシーの見つけた答えをわかってもらえるかは賭けだった。噂によれば恋をしている人間には理屈が通じないものだというし。
「実は、わたしあの後ずっと、メーシャさんに笑顔になってもらうにはどうしたらいいだろうって考えていたんです」
ドロシー側の特殊事情を話して聞かせる。
「わたし、撮った表情が笑顔であったことはあっても、笑顔を探し出して写した経験ってなくって、人間ってどういうときに微笑むんだろうって……」
「笑顔になるとき……？」
「そうです」
ドロシーの心の中に今日一日のグランセルを歩き回った思い出が甦ってくる。
大聖堂の司祭さまの笑顔。
母親と抱えていた赤ちゃんの笑顔。
待っていた恋人がやってきたときの青年の笑顔。
夢中になっていた本をハッピーエンドで読み終えたときの少女の笑顔。
歳経た夫婦の皺を深くした優しい笑顔。
今日一日だけでもドロシーはたくさんの笑顔に出会った。そんな経験をアントンに話しながら、ドロシーは最後にこうつけ足した。
「笑顔はうれしさの反射なんじゃないかなって……」
「うれしさの……？」
ドロシーの言葉を聞いても、アントンはまだピンとこないようだった。
「うまく言えないんですけど。母親が笑顔だったら子どもは笑うし、赤ちゃんが笑ってくれれば母親だって笑顔になるも

のでしょう？　出会った出来事が安心できて優しい気持ちになれたときに人は笑顔になるんだと思います」

　笑い話に大口を開けてガハハと笑うときとか、してやったりとニタリと笑うときはまた別かもしれないけれど、どのみちアントンの欲しているメーシャの笑顔はそっちの顔ではないはずだ。

　笑っていればいいというものではないのだ。

　美女の笑顔が欲しいだけならば写真集でも買えばいいのだし――リベール通信社からも出している――メイベル市長の華麗なる一日写真集とか。

「さきほどのメーシャさんの笑顔は、頼み込んだわたしに対して向けてくれた笑顔なんです。アントンさんが手に入れたいって言っていたメーシャさんの笑顔も、同じようにアントンさんに向けてくれた笑顔なんじゃないでしょうか」

　だからあれは違うんです。もう一度そう繰り返した。

　アントンは言葉を無くしたように黙ってしまった。

　夕方の風がドロシーの襟足を撫でて過ぎてゆく。昼の熱を取り去って、少し肌寒くなってきた。

　立ち尽くしていたアントンが声を絞り出すようにして言う。

「僕、友人に言われたことがあるんだよね。『思っていることがあるなら、行動すればいいのに』って……」

　アントンにはどうやら良い友人がいるらしい。

「今まで僕自身、グランセルでの思い出が欲しいだけだって思ってたけど……」

　もうアントンはドロシーの写したメーシャの写真が欲しいとは言わなかった。

「お姉さんの言う通りかもしれない……」

　顔をあげたアントンがドロシーに言う。

「けど。僕にはお姉さんみたいにうまく写真なんて」

　あれ、話が捻じ曲がった。そーいう話ではないような。気まずさを隠すためかもしれないが――ということにしよう。

「これ、もうすぐ発売される予定の新型カメラなんですけど」

　ちび君を見せながら、ドロシーはそれが「誰にでも綺麗に」を合言葉に作られた一般向けのカメラだと説明する。

「先ほどのメーシャさんの写真も、このカメラで撮ったものなんです。どうですか？　勇気を出して、わたしみたいに頼んでみては？」

　ドロシーの言葉に、しばらく考え込んだ末、アントンは頷いてみせる。

「そう、したかったな……」

　過去形だった。少し、哀しい。アントンの中でメーシャとの恋はすでに過去のものになっているのだ。

　これ以上はドロシーには言えない。決めるのはアントンなのだし。彼の前途に新しい素敵な恋が待っていることを願うのみだ。

　ドロシーに何度も礼を言ってから、アントンは去っていった。

　しばらく背中を見送ってから、ドロシーもきびすを返す。

　茜の空が東から藍色へと変わりつつあった。もう、カメラのメンテナンスも終わっている頃だろう。工房で受け取って帰らないと……。

エピローグ

　カメラを引き取り、リベール通信社に戻ったドロシーを迎えてくれたのはナイアルだけだった。編集室が空っぽだったのだ。

「あれー。みなさんはどうしたんですか？」

「校了したから打ち上げに行ったぞ。編集長のおごりでな」

　あっさりと言われて、ドロシーはへなへなと椅子に座りこんだ。だって、そんな話、聞いていない。

「ひーどーいーですよー」

「おまえ、今号、仕事してねえじゃん」

「はっ。確かに！」

　言われてみればその通りではある。確かに今回のリベール通信には一枚の写真も載せていなかったっけ。

　そういえば、クーデター騒ぎが一段落してから、取材旅行にも行ってない。

　カメラのメンテナンスもしたことだし、そろそろ働かないとホントに減給どころか首になりかねない。それにしても、だ。

「そ、それはそうなのですが。わたしも一応は編集室の一員としてですねー」

「働かざるもの食うべからず」

「あーうー」

　今頃はみんなして美味しいものを食べているのかと思うと、納得はできても我慢はできない。

　悔しくてお腹が鳴ってしまいそう。

「あれ？　じゃあ、なんでナイアル先輩は残っているんですか？　今号、記事を載せていましたよねー？」

「おまえ、昼のこと覚えてねえのかよ。編集長、駄洒落月間だぞ」

「ああ……」

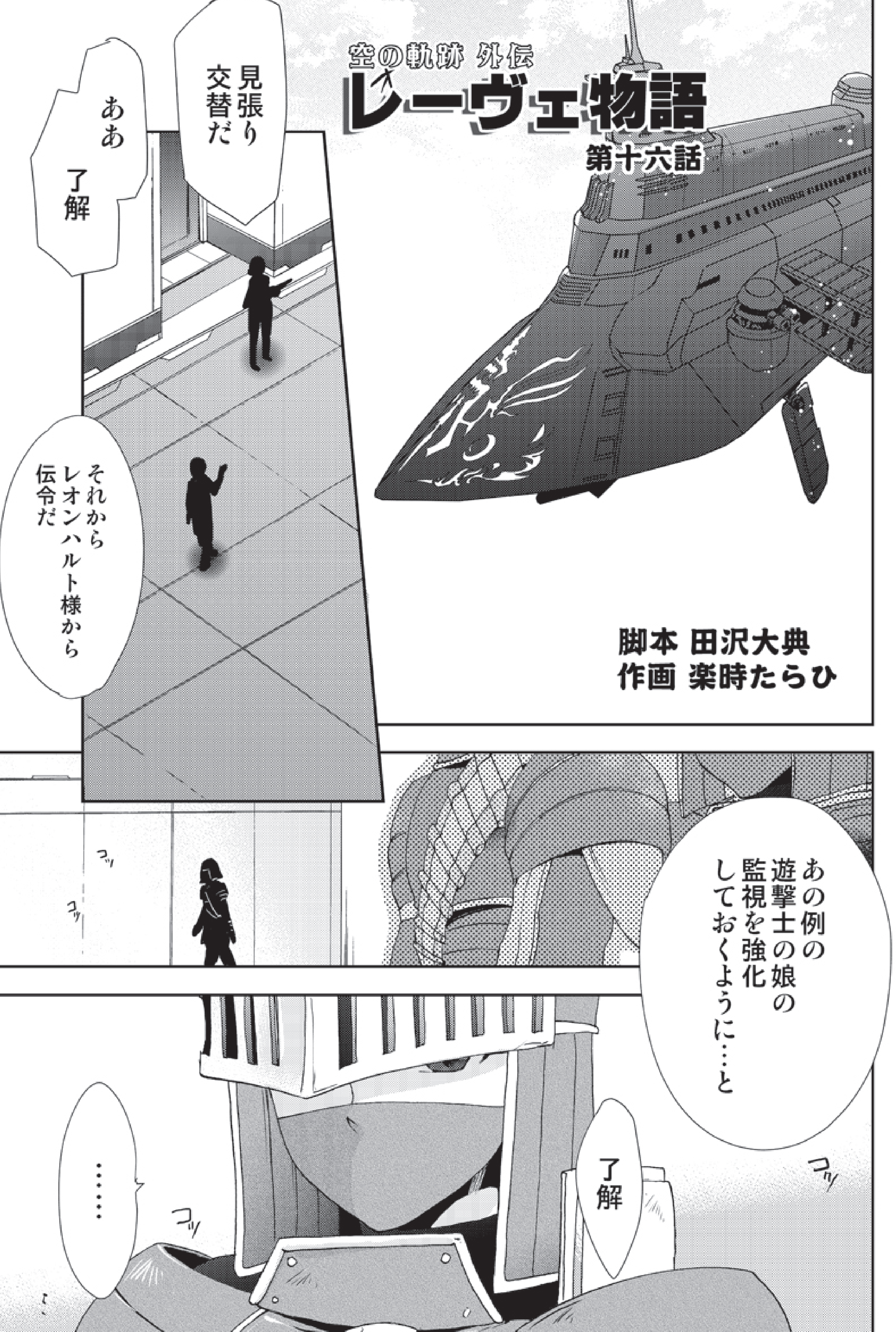
「旨いもの食いながら、あれを聞きたいか？　まあ、記事の見直しもしたかったしな」

　言いながら、ナイアルは目を落としていた最新号の試し刷りを机に放り投げた。財布をポケットにねじ込みつつ、椅子

の背にかけていた上着を羽織る。
「あれ？　どこかに出かけるんですか？」
「《バラル》でよけりゃ奢ってやるが、どうする？」
「へ？　ナイアルせんぱいってば、何か悪いものでも拾い食いしましたか」
　奢るなんて言葉が先輩から出ようとは。
「……腹が減っただけだ。いらねえなら残っててもいいぜ」
　明後日のほうを向きながら言って扉を開けて外に出ていった。
「せ、先輩！」
　慌てて追いかける。
　通りに出たところで待っていてくれた。
　既に夜の帳が降りていて、導力灯の白い明かりが石畳に丸く落ちている。
　明かりに照らされたナイアルの顔が逆光になっていて見えない。どんな顔をしているのかドロシーにはわからなかったけれど――
「いつものカレーでいいか？」
　そっけなくそう言うナイアル・バーンズに、
「はい！」
　ドロシー・ハイアットは笑顔を返したのだった。

END

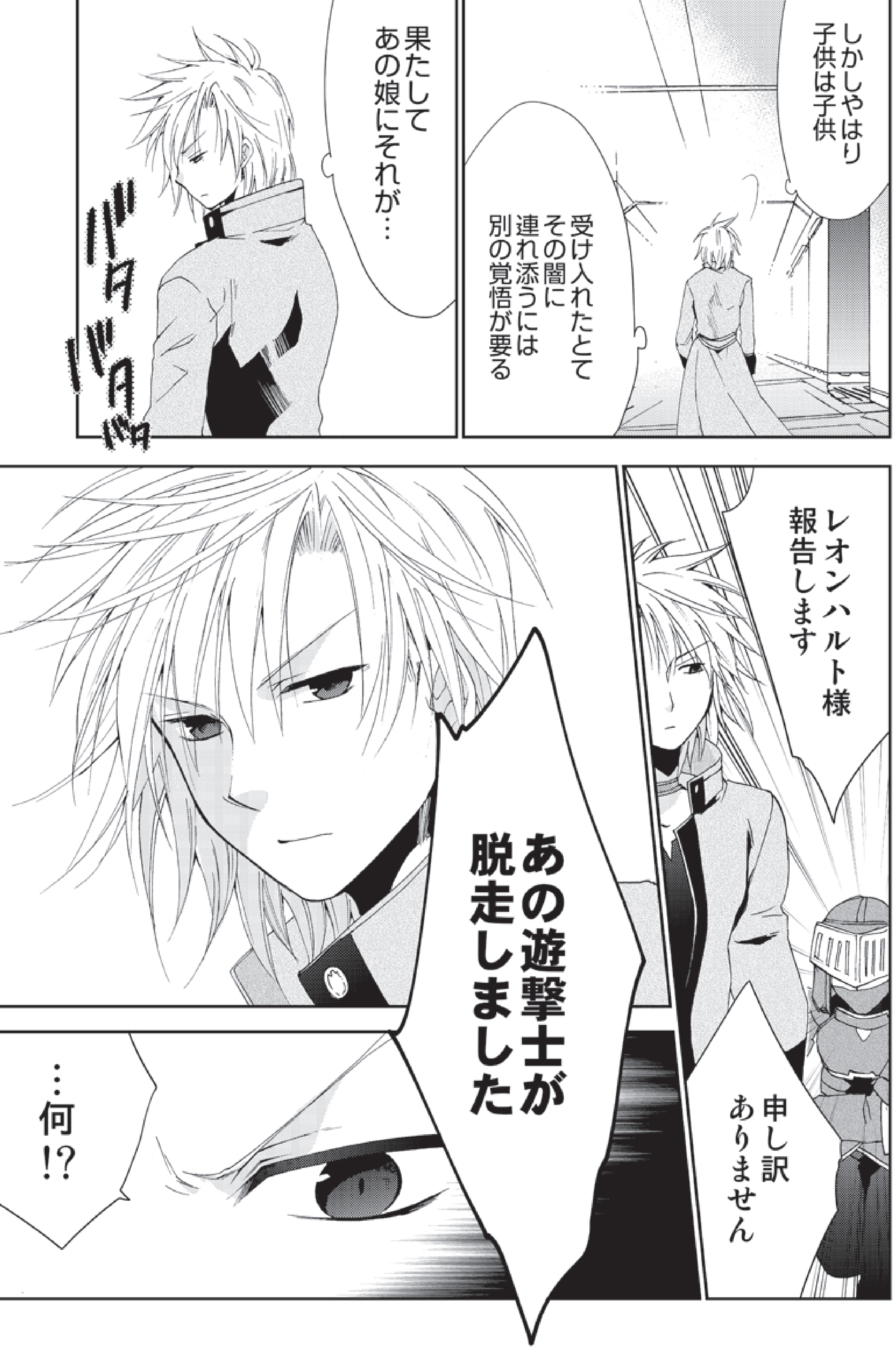


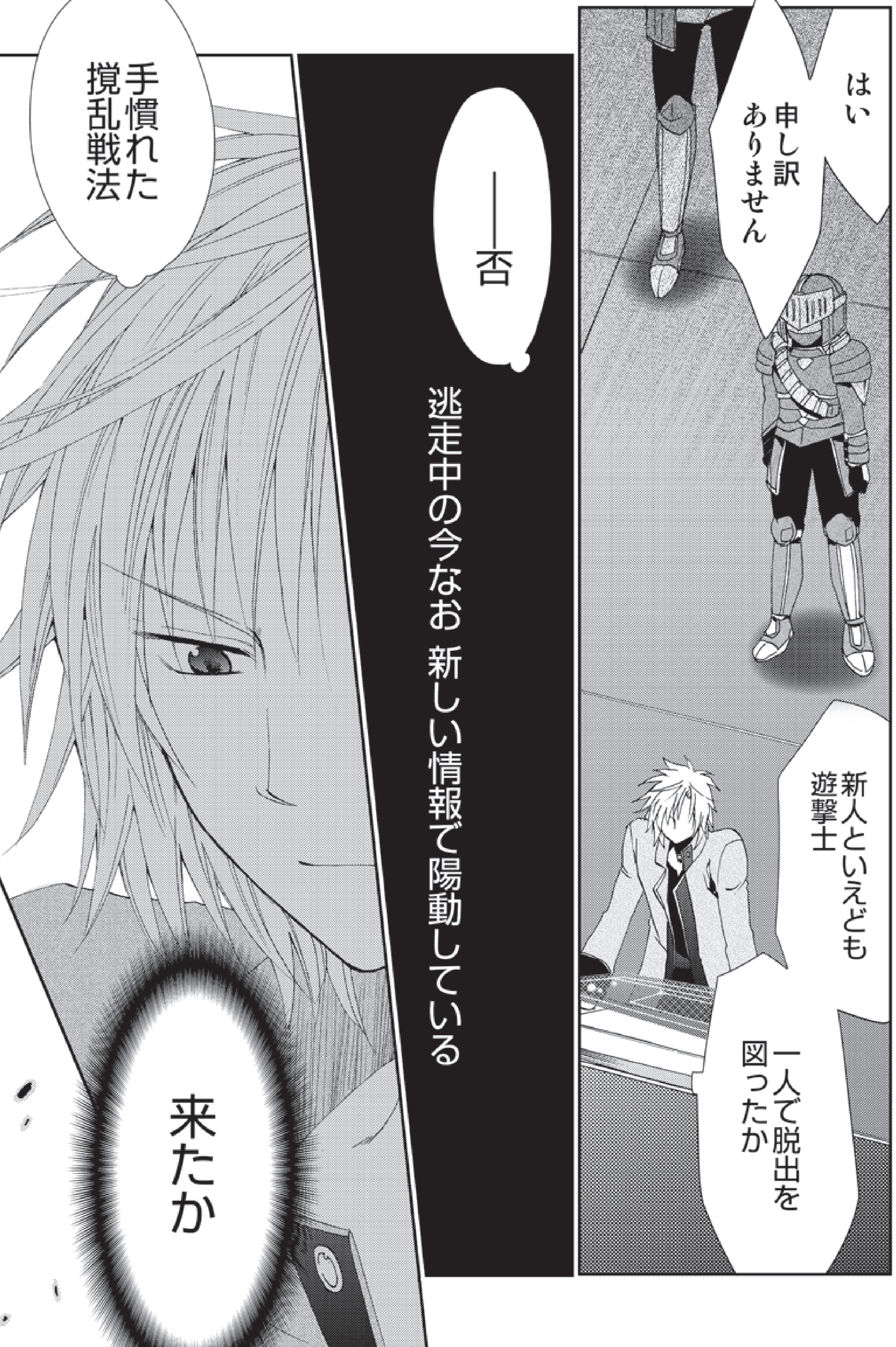



コッ
コッ
コッ
コッ
コッ
コッ
ピッ
ヴヴ……ン
ゴォ…
俺はエステル・ブライトに
俺とヨシュアが抱える闇を――
過去を話した
認証　完了

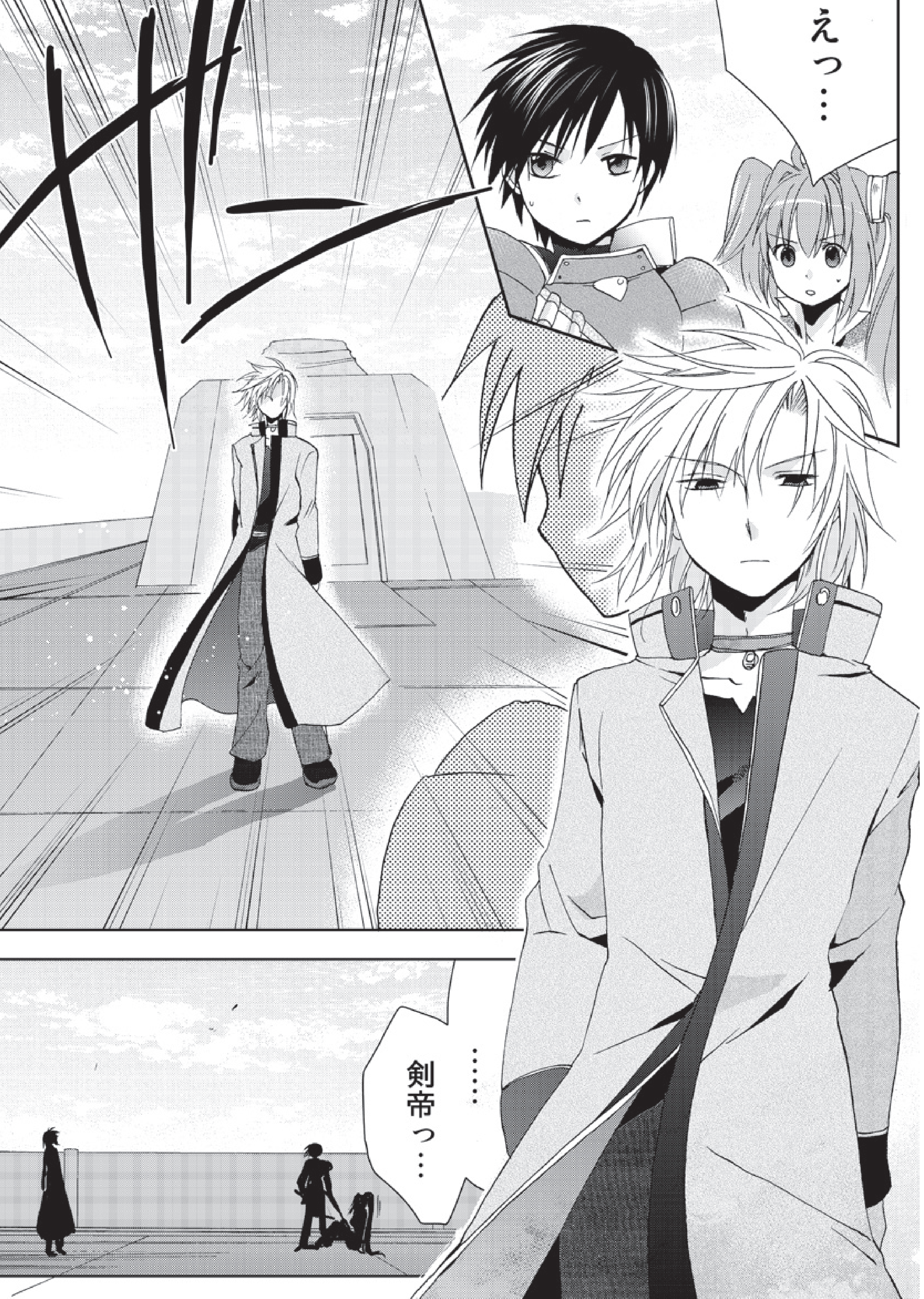

あの娘は驚き
戸惑い
怒り
そして


そのまま…
結社への誘いも
迷いと共に振り切った
ガー……
さすが英雄の血を引く娘だ
聞き終えて尚(なお)笑顔で受けとめるとは豪気
あの目には光があった
抗えない程強烈でいて
曇りのない光が
それは
まるで
青空に近い
感覚の…
……


しかしやはり子供は子供
受け入れたとてその闇に連れ添うには別の覚悟が要る
果たしてあの娘にそれが…
レオンハルト様報告します
あの遊撃士が脱走しました
申し訳ありません
…何!?


司令室に向かう階段で見つかったらしいぞ
なんでもエレベーターに立てこもっているらしい
その情報は古いぞ
今は船尾の方に向かっているらしい
また移動してるのか
くそっ
なんてすばしっこい娘だ
――情報が錯綜しているな

はい
申し訳ありません
新人といえども遊撃士
一人で脱出を図ったか
――否
逃走中の今なお 新しい情報で陽動している
手慣れた撹乱戦法
来たか


ヨシュア
…ヨシュ
ア…
夢…じゃない…
よね…？
……
…夢だったら
どんなにか
気楽だろうけどね…


えっ…
……
剣帝っ…


…ようやく姿を現したか
久しぶりレーヴェ
僕が潜入していたことを予想してたみたいだね…
…当然だろう
——教授がグロリアスを呼び寄せることまで読んだか
執行者としてのカンは完全に取り戻せたようだな
おかげさまでね
お前のことを忘れた日など
あるものか
…だが


隠形というものは一度認識されたら終わり——…
最大の武器を失ったお前がこの剣帝相手に何をするつもりだ?
ヨシュア


俺とお前の力の差を知りながら
その娘を助けに来たのだろう
エステル
下がってて
ヨシュア
なぜあの娘の前から姿を消したヨシュア
守るならなぜ一度捨てた
お前は罪悪感に苛まれながらでもあの娘の傍にいるべきだった
しかしお前は逃げた
お前は
ただの逃避に過ぎん行いをした！

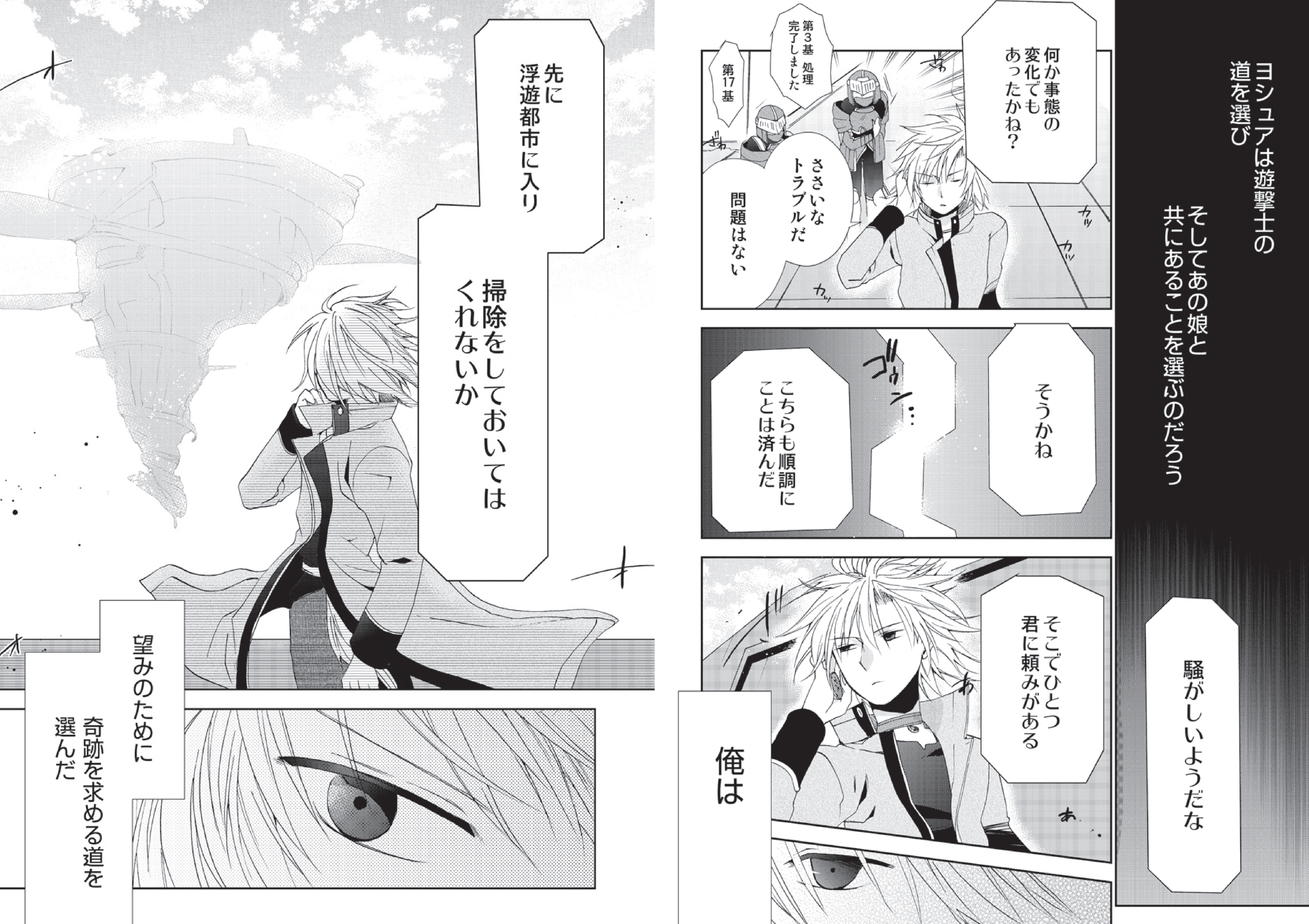

…じゃあ
レーヴェはどうなんだ
レーヴェはどうして今も教授なんかに協力してるんだ
それも姉さんの死から逃げてるんじゃないのか…!?
――俺は自分の望みの為に教授に協力している


だから俺は
俺の前に立ちふさがる奴は斬り捨てる
例え――お前であろうとな


──お前の選択肢は３つある
ギッ
娘と共に投降するか
娘を守ってここに果てるか
娘を捨てて一人逃れるか
選ぶがいい
悪いけど
４つ目の選択肢を選ばせてもらうよ
!!!
…これはっ…

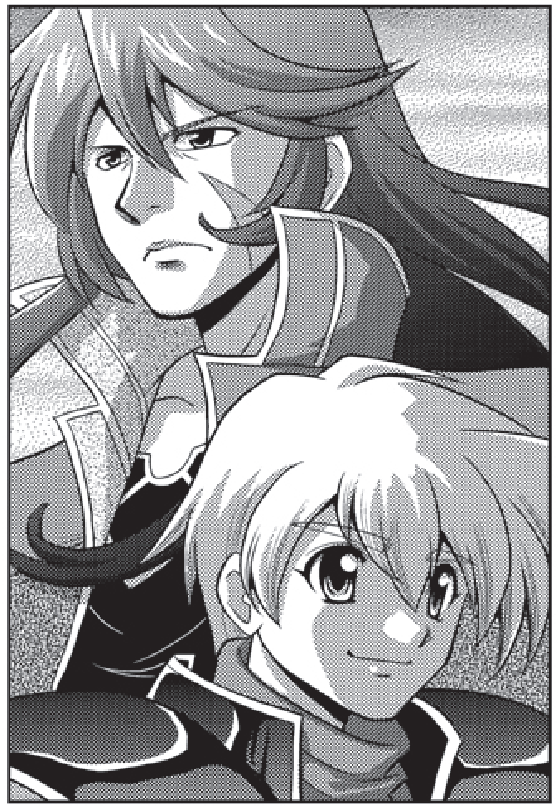

導力機関に細工をさせてもらった
22基のエンジン全てに異なる仕掛けを施している…
解除できるのは現時点でレーヴェだけだ
…計画を阻止するための最後の切り札というわけか
そしてそれをこんなタイミングで切手しまう意味…
……


…今度会う時までに答えを用意しておくがいい
お前のその欺瞞が消え去っていない時は
俺はお前を斬る
俺達の道はもう 交じり合うことはない


ヨシュアは遊撃士の道を選び
そしてあの娘と共にあることを選ぶのだろう
何か事態の変化でもあったかね？
第3基 処理完了しました
第17基
ささいなトラブルだ
問題はない
そうかね
こちらも順調にことは済んだ
騒がしいようだな
そこでひとつ君に頼みがある
俺は
先に浮遊都市に入り
掃除をしておいてはくれないか
望みのために
奇跡を求める道を選んだ


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-224-6
「英雄伝説 空の軌跡」の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの「空の軌跡」の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


もうすぐだ
カリン
俺は あの地で
全ての欺瞞を
断ち斬るのみ――!!!



みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

アリオスが来た



捜索隊



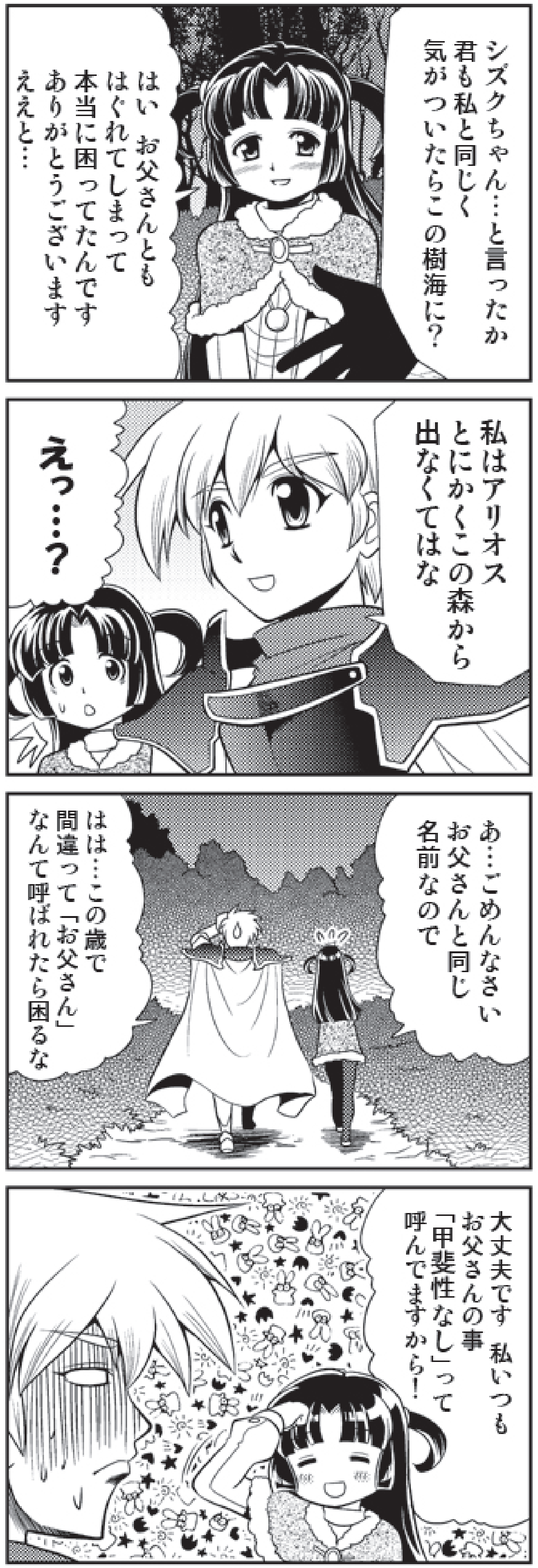
そうだ 樹海行こう



錯綜する情報



シズクとアリオス



アリオスの秘密



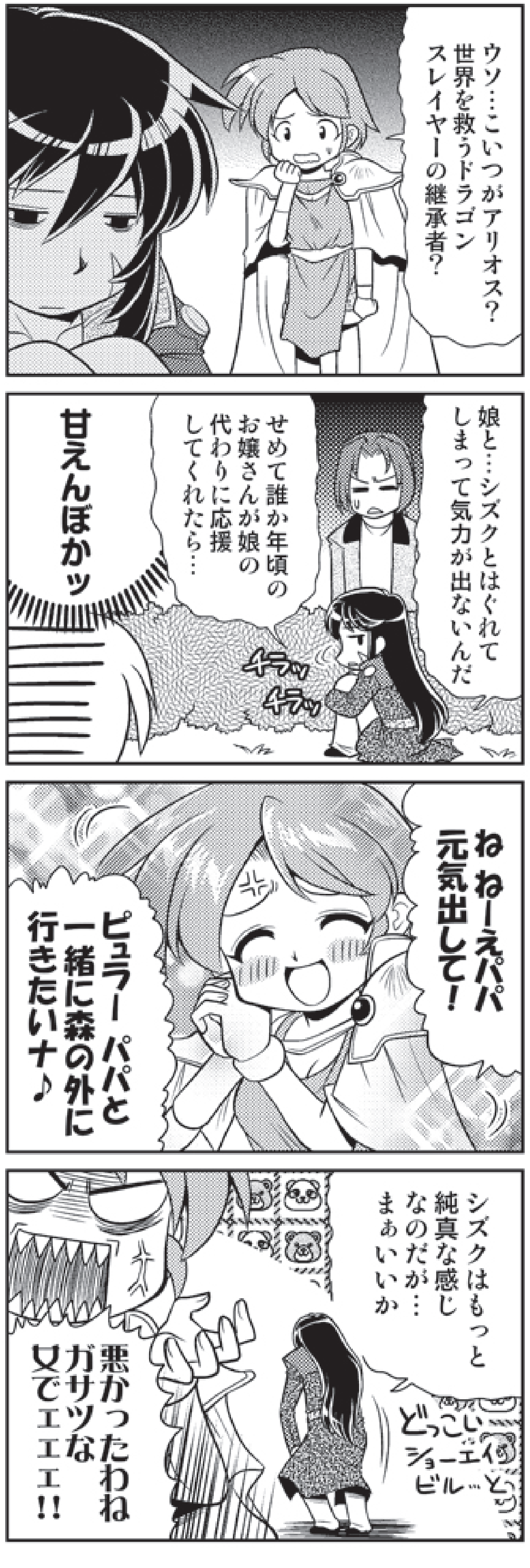
ダルク先生と樹海な仲間達



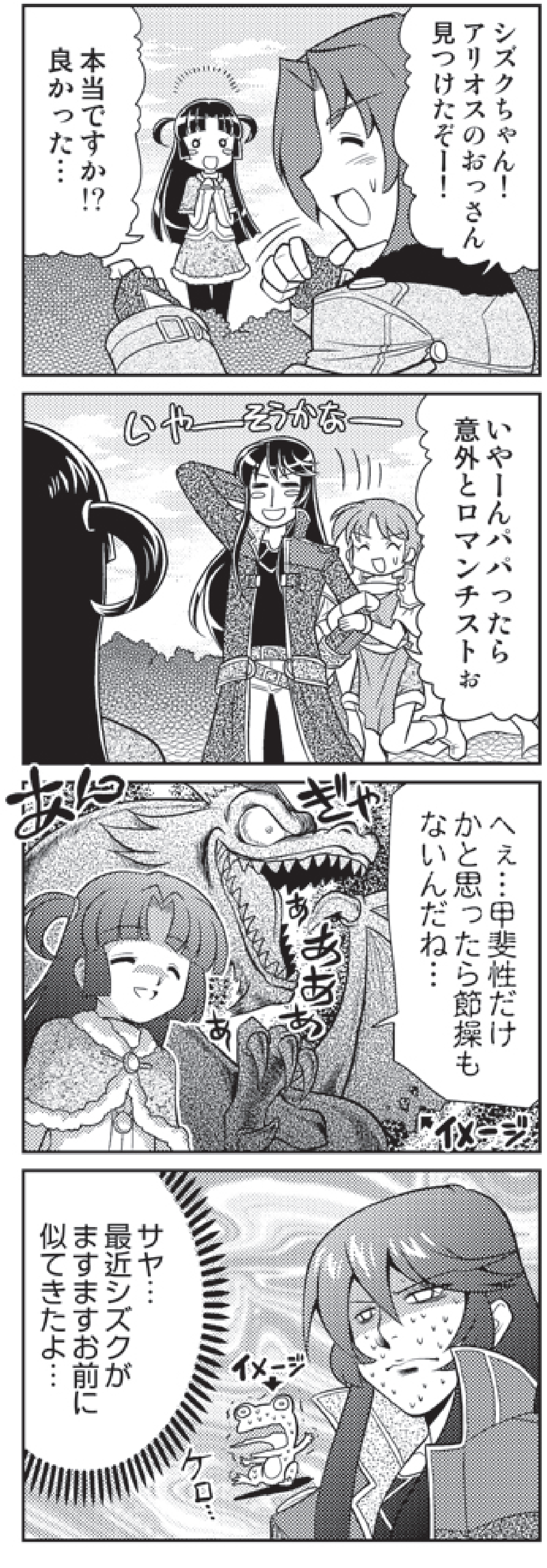
魔法使いの使命



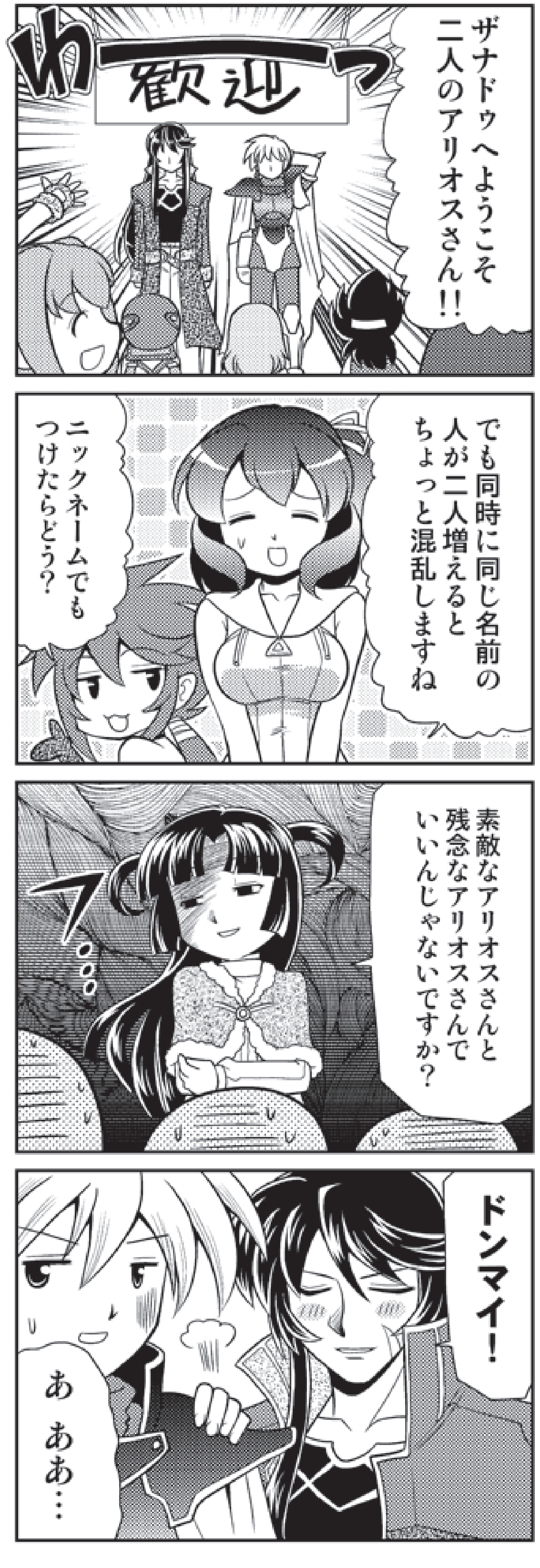
元気の源



さらば風の剣聖



ようこそアリオスさんズ



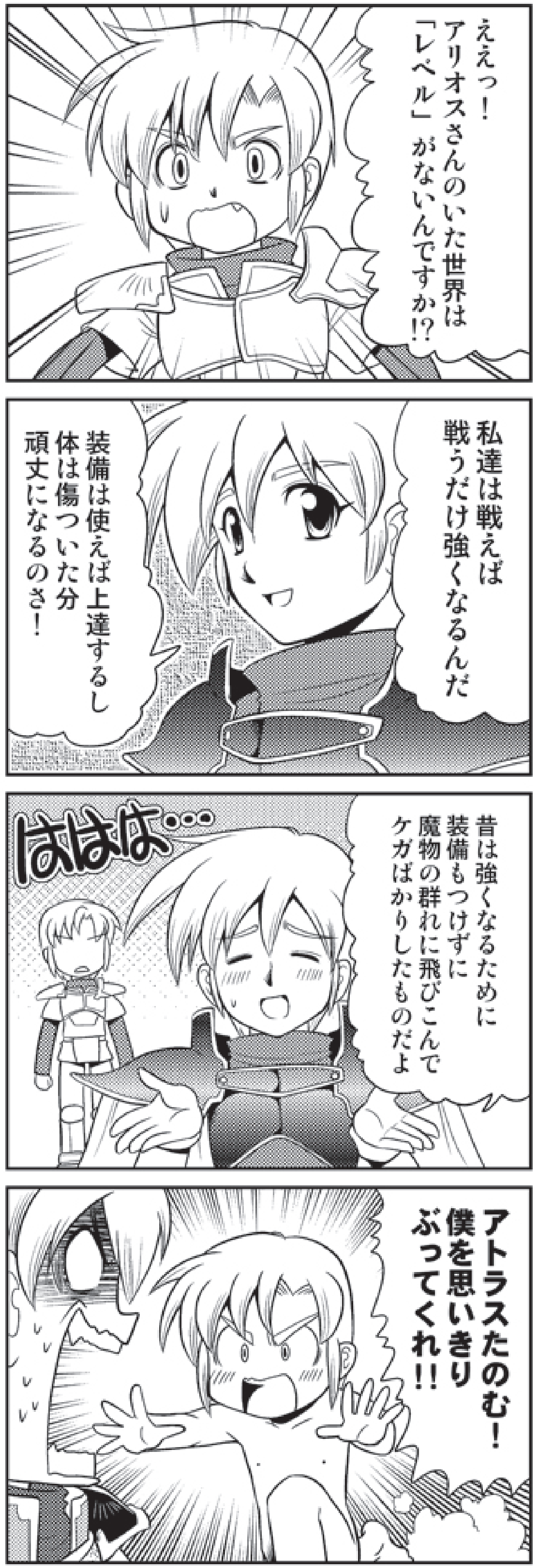
アリオス長官の野望



百騎長と冒険家



変態王子３号



一族のプライド



創業者の加藤が
「いつまでもうちだけが、このままだと思うなよ」
と言ったのを覚えています。 ———近藤季洋



『月刊Falcom magazine』誌上に掲載されたロングインタビューを完全収録。社長・近藤季洋や日本ファルコムのゲームミュージックを演奏するjdkバンドのボーカル・小寺可南子など、ここでしか読めないファルコムの『今』が満載！

- ●日本ファルコム代表取締役社長：近藤季洋
- ●OVA版「英雄伝説 空の軌跡」アニメーション監督・演出家：橘正紀
- ●OVA版「英雄伝説 空の軌跡」脚本家：上江洲誠
- ●ファルコムjdkバンド ボーカル：小寺可南子 ほか

日本ファルコムの『今』と『これから』がこの1冊に！



Falcom Long Interview
ファルコム ロングインタビュー

全国書店にて大好評発売中!!

価格：1,155円（税込）
ISBN:978-4-89610-232-1

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

目指せ！ファルコム一番星!!



何がどうしてこうなった!?『月刊Falcommagazine』でお馴染み、日本ファルコムの歴代人気キャラクターたちが繰り広げるドタバタ四コマコミックが満を辞して登場。新久保だいすけが描くトンデモな学園生活がスタート！





みんな集まれ！
ファルコム学園①
著者：新久保だいすけ

価格：893円（税込）
ISBN:978-489610-245-1

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

小説版 零の軌跡 ショートストーリーズ

エリィの章（後編）

田沢 大典

†

　日曜の朝。朝食を手早く済ませたエリィは、お手伝いさんに見送られながら家の玄関を出た。そこへ弾んだ声がかかる。
「エリィ！」
　門の向こうで、金髪の巻き毛の女の子が、振り切れんばかりに腕を振っている。そんな彼女がおかしくて、ついクスリと笑いながら、小走りに彼女の元へと駆け寄る。
「おはよう、ベル」
「もう、待ちくたびれてしまいましたわ。エリィってば、じらすのがお上手ですわね」
「そんなつもりはないのだけど……」
　ベルと呼ばれたのは、マリアベルだ。日曜の朝とは思えないハイテンションな彼女にやや気圧されつつ相づちを打ちながら、エリィは教会への道を歩き出し、マリアベルも横に並んで続いた。
　パーティーでの出会いから、ふたりは親友となった。正確に言うと、マリアベルが一方的に親友呼ばわりしていたのだが、友人として少し接した時点で、エリィの方も驚くほど自然にそのことを受け入れるようになっていた。
「エリィ、今日学校が終わったら、少しお出かけしません？」
「今日はダメよ。おじいさまが早く帰ってくる日だから」
「えぇ～!?」
　不満そうに頬を膨らませるマリアベル。年頃の少女らしいしぐさだが、彼女がこんな表情を見せるのは、エリィの前でだけだ。
「その代わりといってはなんだけれど。うちでお昼を食べていかない？」
「よろしいんですの!?」
「ええ」
「喜んでお招きにあずかりますわ！」
　そう言ってエリィの腕に自然と自分の腕を絡めるベル。エリィは少し驚いてベルに抗議をした。
「もう、ベル」
「急に腕を組むな、でしょう？　ですが、許可を取ろうとしてもエリィは許してくださらないんですもの」
　マリアベルがエリィに顔を近づけて甘えた声を出す。エリィからするとちょっとスキンシップが過剰すぎるのではないか、とも思うのだが、マリアベルが言うには『親友ならこれぐらいは当然のこと』らしい。
　そう言われてしまうと黙るしかない。なにせ、エリィは親友と呼べるほど親しい友人をこれまで持ったことがないのだから。
　現市長の孫娘という立場がそれをなかなか許さなかったのもある。だが、すべてを家庭環境のせいにしてしまえるほど、エリィは幼くも愚かでもなかった。一番大きな要因は、一定以上の関係になると壁を作ろうとしてしまう自分自身のせいだと、知っていたからだ。
　それはマリアベルも同様だった。もっとも、彼女の場合は基本的に自分以外の人間は付き合うに値しない、と思っていたところがあるので、寂しさなどはまったく感じてはいなかった。ただ、つまらないとは思っていたらしい。現にこうして、自分が心から親友と呼べる存在を持った途端に、毎日がこんなにもウキウキと楽しいのだ。だからスキンシップもちょっとやりすぎてしまうのだけど、それはそれで仕方のないことだ、とマリアベルは考えていた。エリィの都合はあまり考慮していなかったが。
「うふふ……」
「どうしたの、急に？」
「私、毎日が最高に幸せですわ！」
　マリアベルが突然言い出したことを、エリィは否定しなかった。ただ笑顔を見せ、少し歩きづらそうに教会への道を歩いていた。

　礼拝が終わり、授業の時間。
　教会に併設された教室には、十数名におよぶ生徒達が集まっていた。みな、このクロスベル市に住む子供達である。出自も様々で、エリィやマリアベルのようなよいところの子息から、クロスベル市内でお店を営む者の息子、他の国から

クロスベルに赴任してきた企業に務める親を持つ娘、中には旧市街の近くからわざわざ来ている者もいた。

　女神エイドスの恵みはあまねく人々に降り注がれるべき、という教えから、教会は日曜学校の受け入れについて特に制限はもうけなかった。そのため、こうして様々な階級の子供達が一同に揃うこととなる。

　上流階級の一部には、私塾や家庭教師をつけることを選ぶ人々もいたが、エリィとマリアベルはふたりとも日曜学校に通っていた。

　エリィの場合は、祖父ヘンリーの『垣根なく多くの人と交流すべき』という教育方針から日曜学校に通うようになっていた。マリアベルは、父ディーターが慈善事業の一環として多額の寄付を教会にしているから……というのもあるが、だいたいはエリィと机を並べて勉強したいから、である。

　これほどバラエティに富んだ生徒達が集まるので、なかなか授業はうまく進まない事が多い。そのため、各自が自習をし、分からないところを教えあう形式が多くはなる。

「ですから、ここの代入式を、こう入れるんですわ」

「えっと……」

　エリィとマリアベルは机を寄せて、算数の勉強をしていた。エリィが問題を解いているのを、マリアベルが覗き込む格好だ。といってもふたりがやっているのは算数と呼ぶには少々高度なものだったが。

「ここの数字が6だから、倍になって……xは12、かな」

「そう、正解ですわ！　さすがはエリィ！」

　ほめそやすマリアベルをちょっと困った笑顔で見るエリィ。

「それじゃ、後は練習問題を解くわね。ありがとう、ベル」

「もうお教えしなくていいんですの？」

　名残惜しそうに言うマリアベル。

「だって、私に構っていたら、ベルが勉強する時間がなくなっちゃうじゃない」

　そういうとマリアベルは、甘いですわ、と前置きをして話し始めた。

「この程度の数式なら、目をつぶっていても解けてしまいますわ。今さらやるところじゃありませんもの」

　さすがに目をつぶっては問題が分からないので解けないのではないだろうか、とエリィは心の中でつっこむ。

「でも、自習用にって持ってきてた本があったでしょう？」

　そう言ってエリィは、マリアベルの手元にある本に目を落とした。分厚い本に『導力技術基礎概論』と書かれたそれは、明らかに子供が読むような本ではなかった。

「あぁ、これはいいんですのよ」

　その本のページを少しつまみ、ほおづえを突きながらペラペラと興味なさそうにめくる。

「一応基礎もちゃんと勉強しておこうと購入したのですけど、だいたい分かってることでしたわ。まったく、読んだ時間を無駄にしてしまいましたわね」

　その言葉を聞いてエリィは目を丸くした。導力技術と言えば、今や自分達の生活には欠かせないものだ。導力灯から鉄道まで、ありとあらゆるものを駆動させるチカラ。それが導力技術だ。それを基礎とはいえだいたい把握しているという。

「すごいわね……ベルは」

「え？」

「私も算数は不得意ではないと思ってたけど、ベルのはレベルが違うっていうか……ううん、私なんかと比べちゃいけないわよね」

「まぁ、レベルが違うのは確かですわね」

　マリアベルは悪びれずさらりと言う。

「私ほど頭の良い子供が何人もいたら、世界はもうちょっとマシになってますわ」

　その言葉には、なんの気負いも誇張もない。ただ、ありのままの事実を淡々と述べているだけ。エリィはマリアベルの、こういう物言いが出来るところが、自分と一番違うと感じていた。だからこそ、彼女にだけは嘘偽りなく自分の思ったところを話せるのだ。

「確かに。でも、私以外の人にそういうこと言うと、嫌われちゃうわよ」

「かまいませんわ。私はあなたただひとりに好かれれば、それで充分！」

　そう言ってマリアベルは、右手でエリィの右肩をそっと抱いた。

「ちょ、ちょっとベル」

「さ、次はこちらの代入式に挑戦ですわ！　大丈夫、さっきの問題が解けたのなら、楽勝です」

　あくまでべったりとコーチをするつもりだと分かり、エリィは小さなため息をついた。

自習の時間が終わると、シスターによる授業の時間となる。

　この時間は、みなが席に座り、シスターの話を聞く。シスターの話は多岐に渡り、女神エイドスの教えから、歴史、社会、国語、時には音楽なども教える。今日の授業は歴史だ。

　しかし今、教室内に響いているのはシスターの声ではなく、エリィの声だった。

「こうして、クロスベルは自治州として独立することが出来ました。そのために、時の自治州政府と、帝国と共和国の政治家達が連日連夜の討論を重ねました」

　エリィが説明しているのは、クロスベル自治州の成り立ち

だ。彼女にとっては最も得意とする分野であり、まさに立て板に水と呼ぶにふさわしい説明をしていた。

「なんでクロスベルのことを決めるのに、帝国と共和国の偉い人達が来ているか、分かる?」

「んーと……」

　エリィは少し離れたところにいる、三歳ほど年下の男の子に声をかけた。と、その横に座っていた同じ年ぐらいの女の子が声をあげる。

「お隣だからに決まってるじゃない」

「そう。クロスベルは帝国と共和国と国境を接している。つまり、お隣でご近所よね。だから、決まり事を決める時も、自分達だけというわけにはいかないの」

　エリィのかみ砕いた説明にそれぞれ納得した顔を見せる子供達。その様子を、シスターは満足そうに見つめていた。

　そしてマリアベルもまた、感嘆しつつ眺めていた。自分なら、こんなにていねいな説明は出来ない。『分からない人間に分かるように教える』ことがマリアベルにとっては苦痛以外の何者でもないからだ。分からない人間に物を教えるなど、時間のムダだ。彼女はそう思って生きてきた。

　しかしエリィは、分からない相手だからこそ、言葉を尽くして分かってもらおうとする。それは彼女の祖父が、そして父が政治家だということと関係しているのだろう。

　エリィが分からない子供達に教えている様子を、マリアベルは女神エイドスのようだと思いながら見ていた。愚かで哀れな人間に慈愛でもって英知を授ける。エリィが聞いたら絶句して赤面してしまうので言わないが、マリアベルの中で、彼女の存在というのはそれほど大きかったのだ。

「ここから、クロスベル自治州の歴史ははじまったのだけど……えっとシスター、これぐらいでいいですか?」

「はい、ありがとう。みなさん、大変分かりやすい説明をしてくれたエリィさんに拍手を」

　みんなからの拍手を照れくさそうに受けるエリィ。そんな彼女の恥じらう顔を見て、ああいう表情も最高ですわ、とマリアベルは思いながら、誰よりも大きな音で拍手をしていた。

　日曜学校が終わり、エリィとマリアベルは、約束通りエリィの家へと向かった。

　用意されたお昼ご飯はパスタで、トマトベースの味付けに海産物がふんだんに入っている。大皿にはサラダやフルーツなどが並び、彩りも鮮やかだ。

「エリィのおうちの家政婦さんは、本当に料理がお上手ですのね」

　そう言ってマリアベルは、パスタに舌鼓を打った。その幼いながらも整った顔立ちからすると、ちょっとほおばりすぎ

ではないか、とエリィが心配するほどである。

「我が家にヘッドハンティングしたいぐらいですわ」

「ヘッドハンティング?」

　聞き慣れない単語に、エリィが首をかしげる。

「優秀な人材を引き抜くことですわ。お父様が使ってましたの」

　マリアベルの家では、経営関係の用語が普通に飛び交っているので、こういう単語も自然とマリアベルの知識に蓄えられるのだ。

「勝手に引き抜かないで。おじいさまが困ってしまうじゃない」

　そう言って笑うエリィ。しかし、マリアベルはエリィの手元にあるお皿を見て、食事があまり進んでないのを確認し、やっぱり、と内心でため息をついた。

　エリィの食欲がないのは、彼女が小食だからではない。彼女が色を認識することが出来ないからだ。

　といっても、目そのものが悪いわけではない。

　ふたりが親友と呼べるような仲になったある日、エリィはマリアベルに、自分の秘密を打ち明けた。マリアベル以外がすべてモノトーンに見える、と。

　マリアベルは彼女の(というよりも父ディーターのだが)あふれる財力とコネを使い、エリィを当代随一の眼科医に診せた。もちろん、秘密を厳守させる、という同意書付きで。エリィはそのことが祖父にばれることを、極端に恐れていたからだ。

『もしもこのことを知ってしまったら、おじいさまがとても悲しむ』

　そのひと言で、どうしてエリィはいつも自分以外の人ばかりを心配するのだろう、とマリアベルはやきもきしたが、その分自分がエリィの心配をすればいいのだ、と頭を切り換えた。

　結局、眼科医による診断の結果は「目の機能にまったく異常はなし。おそらくは心因性のもの」とのことだった。心因性、と言われた時に、エリィはハッとした表情をうかべたが、詳しいことは教えてはくれなかった。

　マリアベルは、薄々はそれが家庭の事情だろうとは気づいていた。現市長ヘンリー・マクダエルの息子は政治家だが、失脚し表舞台から姿を消した、という話は知識として後で調べた。そして、エリィの家には両親がおらず、親族は祖父だけ。これだけ材料が揃えば、誰でも分かることだった。

　だが、彼女は詮索することはしなかった。自明なことを追求するのは時間のムダだし、なによりエリィが自分から話さないことをほじくり返すような、デリカシーのないマネはしたくなかったのだ。

「ベル？」

考え事で手が止まっていたのだろう。それまでパスタをほおばっていたマリアベルが急に動きを止めたので、エリィが心配になって声をかけたのだ。

そのちょっぴり不安そうな表情を見て、マリアベルは。こういう表情も最高ですわ！　──そう思うのだった。

「あまりにパスタがおいしいから、どんなレシピなのか考え込んでしまいましたわ」

「あら、料理はしないんじゃなかったの？」

「できるけどやらないだけです。あんなのは、科学実験と同じですわ」

その言葉に、困った笑顔を浮かべるエリィ。そんな彼女のお皿に、マリアベルは強制的にサラダとフルーツを取り分けた。

「パスタだけでなく、サラダもフルーツも最高ですわよ。さ、エリィもお食べになって！」

「どっちの家に招かれたのか、わからないわね……」

苦笑するエリィを前に、マリアベルは今度はサラダに舌鼓を打った。

翌日。

エリィとマリアベルは、クロスベル市街の中心部で待ち合わせをした。ふたりでウィンドウショッピングに出かけるためである。

マリアベルはいつものようにぴったりとエリィに寄り添い、『腕を組む』というより『腕を絡めて』歩いていた。

「ベル、いつも言ってるけど、これって歩きにくくないかしら……」

「多少の困難も、愛には必要なスパイスですわ」

何が必要なんだろう、とか、愛ってそもそもなんだろう、と哲学的なことを考えながらエリィが歩く。と、その時、何者かの肩がぶつかってきた。

「きゃっ！」

「うわっ！」

ぶつかってきたのは、エリィとほぼ同じ年の女の子だ。オーバーオールと使い込まれ、つばの折れたキャップが、活動的な印象を与える。

「ご、ごめん」

「いえ、こちらこそ」

エリィと女の子は会釈しあった。と、女の子の横にいる、少し優男風の少年が茶化す口調で言った。

「ちゃんと前見て歩かないと危ないぞー」

「隣でガンガン話しかけてきたのはどこの誰よ！」

女の子がいきなりまくし立てたので、エリィは面食らってしまった。その様子を見かねて、優男風の隣にいた少年がフォローに入る。

「ごめん、気にしないで。ところで、ケガはない？」

「あ……平気、です」

この少年も、自分と同じ年ぐらいだろうか。栗色の髪と柔和な表情は柔らかい印象を与えるが、瞳に力があり、不思議と目がいってしまう。

「ちょっと、いきなりぶつかってきて失礼じゃありませんこと!?」

隣で様子を見ていたマリアベルが、これ以上ないほどトゲトゲしい口調で言い放つ。ちょっと、とエリィが止める前に、その少年は深々と頭を下げた。

「本当に、ごめん！」

自分のことじゃないのに、こんなに素直に謝るなんて、とエリィはちょっとズレたところに感心していた。

「ほら、ウェンディも謝って」

「ごめんね、本当に」

「すみませんね」

ウェンディと呼ばれた女の子が、済まなさそうに頭をかきながら謝る。そして、隣の優男風の少年もそれに続いた。

「あ、ううん。気にしないで」

「まいりましょう、エリィ」

そう言ってマリアベルは、ぐいぐいとエリィを引っ張っていってしまった。

「ベル、そんなに引っ張らないで」

抗議の声をあげるエリィの言葉も耳に入らない様子で、マリアベルはつぶやいた。

「汚らわしい男に、しかもあんな頼りげないのに見とれるなんて……！」

「え？」

「なんでもありませんわ！　さ、エリィ。早くドールショップにまいりましょう！」

気分を変えるために、マリアベルは努めて明るく言って、エリィをぐいぐいと引っ張っていった。

ふくれっ面のマリアベルだったが、行きつけのドールショップに行ったことでだいぶ機嫌が直り、エリィはホッと胸をなで下ろした。

「ごらんになって、エリィ。なんて精巧で美しいのでしょう……」

そういって、ほう、とため息をつくマリアベル。ドールを見ている時のマリアベルは、いつもの理知的な面や攻撃的な面が表に出てこない。年頃の少女の顔を見せる。エリィは、そんなマリアベルの表情も好きだった。

「こちらは新作ですってよ。からくり仕掛けで動くとか。以前、東方もののからくり人形でお茶を運んでくるのは見ましたけど、あまり見目が麗しくなかったですわ。でも、これはかなり好みですわね」

そう言いながら、店内を歩くマリアベルの後ろをついていく。ドールショップは落ち着いた雰囲気で、外とは空気までが違っているようだった。

「はぁ～、これもいいですわね！　瞳の細工が細やか！　ローゼンベルク工房製のものにはかないませんけど、なかなか腕の良い職人を抱えていますわね」

ローゼンベルク工房とは、ドール好きの間では有名な工房である。その技術は精緻を極め、まるで生きているかのようなドールを作ると評判になっていた。

マリアベルがエリィを手招きする。エリィは彼女と並び、少し中腰になりドールの瞳を覗き込んだ。

「ほら、この虹彩を見てくださいな！　見る角度によって、少しずつ色が変わるんですの。素敵ですわね」

「……ええ、本当ね」

一瞬の間の後、同意するエリィ。しかし、その間をマリアベルは聞き逃さなかった。

「エリィ……やっぱり、まだ？」

色を取り戻していないのか、と続けることはしなかった。

ふたりの間では、絶対に他人に明かさない秘密だったから、むやみに口にするのもはばかられたからだ。

マリアベルの言葉に、エリィはうつむき加減でうなずく。その曇った表情を見て、マリアベルは何か決心したかのように、彼女の手を取った。いつもの甘えるような、絡め取るような動きではなく、しっかりと。

「ベル？」

「……そろそろ、話してくださってもよろしいんじゃありませんこと？」

何についてなのか、お互いに口にしなくても分かっていた。エリィがこうなってしまった原因。家族のことだ。

エリィは一瞬視線をそらした。身内の恥をさらすようなものだ、と思い、すぐに違う、と自分の考えを否定した。

——わたしは怖いんだ。あの時のことに向き合うのが。

そして、いつまでも逃げられないことにも気づいていた。だとすれば、はじめて出来た親友に打ち明けるのは、ちょうどよいきっかけなのではないか？

エリィの迷いを見透かすように、マリアベルは続けた。

「わたしたちは、親友ですわ」

その言葉に押され、エリィはうなずいた。

「どこか、静かに話せる場所、あるかしら？」

結局、人目があるお店よりかは、ということでマリアベルは自分の家にエリィを招いた。

マリアベルの自室は、ドールに囲まれている。ファンシーかと思いきや、専用の棚にずらりと並べられたドール達はある種の重厚な雰囲気すら漂わせていて、まるでドールショップのようだった。

その他の家具は、シャープな印象のものが多いが、実用一辺倒ではなく、シンプルで美しく機能的なもの、というのが集められていて、なるほどマリアベルらしい好みだとエリィは思った。

そのマリアベルは、テーブルをはさんでエリィと正対していた。手には、彼女自らが入れたコーヒーのカップ。エリィの手元には紅茶。さりげなく、彼女が好きな銘柄をチョイスしている。

「……やはり、ご両親のことでしたのね」

そう言って、カップをソーサーの上に置く。立てた音が、静かな部屋に響いた。

お茶を出した後は、マリアベルはほとんどしゃべることなく、エリィが淡々と話すのを聞いていた。それは、エリィの両親の話。政治家一族ということで少し特殊だったけど、平凡な幸せがあったこと。そして、その幸せはもう失われてしまったこと。

マリアベルがだいたい予想していたことだった。

「ごめんなさい、一方的に話してしまって」

そう言って彼女は、手元にあった紅茶をひと口飲んだ。すでに湯気は消え、冷め切ってしまっていた。

マリアベルが予想していたことと、ただひとつ違うのは、エリィが思っていた以上に冷静に語っていることだった。彼女の傷はもっと深く、心を抉っているのではないかと考えていたのだ。

それならば、こちらも明るく、あまり深刻な問題ではない、と伝えてあげることが大事だと彼女は考えた。

「お父様の元にはね、政財界にいる多くの方々から、お手紙が届きますのよ」

急な話の切り出しに、エリィは一瞬戸惑った。

「結婚しました、とか、子供が産まれました、とか、そんな他愛もないものばかり。まぁ、本当に重要なことは会って話さないといけませんから、手紙で来る内容なんてそんなものですけど」

「ええ」

エリィが少し困ったような表情で、相づちを打つ。真意を測りかねているのだ。

「でも気づいたんですの。離婚しました、と手紙で書いてくる人はいない」

え、とエリィの表情が固まる。
「でも、実際にはしているのでしょうね。数年前とは違う方と結婚した、と手紙を送ってくる方が、それこそ何人もいらっしゃいますから」
マリアベルは記憶力もあり、父の机の片隅で見た手紙の差出人も記憶してしまうのだった。彼女にとってはあまり使いたくない記憶領域なのだが、覚えてしまっているものは仕方がない。
「そのことをお父様に聞いても、困った顔をしただけでしたわ。つまりそれぐらい、ありふれていることですのよ。人と人の心が変わる、なんていうことは」
話しながら、これなら説明下手な自分でも伝えられると、ひとつのたとえ話を思いついた。
「愛とは変化するもの。貴金属のように永遠不変のものではないのですわ、きっと。だからこそ人は、ダイヤモンドのように変わらぬものに想いを託すのでしょうね」
マリアベル自身は、宝石は美しいと思うものの、それに想いを託す気持ちは正直分からなかった。だが、エリィならきっと分かるだろうとふんだ。
「ですけど、残念なことに、やはり心変わりをしてしまうものです。仕方ありませんわ、人というのは移ろうものですから」
人は移ろうもの。心とは曖昧模糊としたもの。錬金術を学び、導力を学ぶマリアベルからすれば、そんな人の気持ちはよく分からない。だからこそ、彼女ははっきりと答えの出る錬金術や導力を好んだ。
「だからエリィ、離婚というのはそれほど特別なことではないと――」
「いい加減にしてちょうだい！」
最初、その怒号がどこから飛んできたのか、マリアベルは分からなかった。しばらくしてようやく、目の前で親友が肩を振るわせているのに気づいた。
「エリィ……？」
「お父様とお母様は確かに愛し合っていた！　わたしには分かる！　何も知らないのに、勝手なこと言わないで！」
ようやく心を開いて親友と呼べる人間に話したのに。
辛く暗い過去と向き合おうと勇気を出して口にしたのに。
その結果が、大好きな両親を否定されるような言葉だったことに、エリィは思わず激昂してしまっていた。
一方のマリアベルは、ただひたすら戸惑っていた。
なぜエリィは怒っているんですの？　そもそもこの怒っているのは本当にエリィ？
あのいつも優しく、柔らかい笑顔で微笑む彼女と、目の前の人が結びつかず、マリアベルは戸惑うばかりだった。それ

でもなんとか取り繕おうとし、声をかける。
「違うんですのエリィ。これは」
「もう聞きたくない！」
そう言って首を振るエリィ。彼女の目に光るものを見つけてしまい、マリアベルは自分がどうやらとんでもないことをしてしまったと気づいた。
「あの、聞いてエリィ、わたしは」
彼女を落ち着かせようとして、マリアベルは手をさしだした。その手を、エリィは反射的に払おうとして。
ぱちん、とマリアベルの頬をはたいてしまった。
ぶった方も、ぶたれた方も、何が起こったのか分からず唖然として、時が止まったかのようだった。
「……っ！」
先に動いたのはエリィの方だった。何も言わず、部屋を飛び出る。マリアベルはそれを追いかけることも出来ず、ただ呆然と、ぶたれた頬を手で押さえるだけだった。

その後、夕食も取らずにマリアベルは秘密の地下室で考え事をしていた。
すでに頬の痛みは引いていたが、彼女のショックは未だ消えず、何故エリィはあんなに怒ったのだろうと考えては、ぶたれた時のことを思い出し、また呆然としてしまう。そんなことを繰り返していた。
「いいかい？」
その声に気づき、ハッと振り替えると、ドアが開けられ、ディーターが立っていた。
「何回かノックしたのだけど、気づいてもらえなくてね」
そう言いながら、にこやかな笑顔で部屋に入ってくる。父のまぶしいほどの笑顔が、今は少しうっとおしく感じてしまっていた。
「本も広げずにぼーっとしているなんて、らしくないな」
机に向かっているマリアベルの横に立ち、ディーターは微笑みかける。マリアベルがどうしようかと思案していると、ディーターはスッとかがみ、同じ視線の高さからマリアベルの顔をのぞきこんだ。
「エリィ君のことかい？」
驚いて息を呑む。その表情を見て、ディーターはやっぱり、とうなずいた。
「彼女にだいぶご執心だったから、そうじゃないかと思っていた」
「あの、お父様……」
「うん？」
「お話、聞いてくださいますか？」
「もちろん。その前に、イスに腰掛けてもいいかな？　長い

話になりそうだし」

　それからマリアベルは、今日あった出来事を話した。ようやく打ち明けてくれたエリィの両親の秘密を話すのは気が引けたし、ちくりと胸が痛んだが、父ならば、と話をした。が、マリアベルが気に病むまでもなく、ディーターはすでに知っているようだった。政財界では有名な話だったのだろう。

　ひと通り話を聞き終わり、ディーターはふう、とため息をついた。

「ベル。おまえは優秀だ。わたしが基本概念を理解するだけでも相当苦労した錬金術を、まるで息を吸うがごとく習得し、導力分野にまで手を広げた」

「ええ」

　マリアベルは謙遜せずに答えた。そもそも、謙遜する意味がなかったからだ。お父様は、ただの事実を述べただけ、とマリアベルは思った。

「では、おまえの目から見て、わたしはどう映る？」

「お父様は、経営者としてはとても優秀ですわ。錬金術師としては凡人ですし、少しお人好しすぎる嫌いがありますけれど」

　娘のあけすけな物言いに、父は苦笑した。

「そう、それは正しい見方だ。だが、それを言われた側はどう思うかな？」

「仕方ありませんわ。目に現れた事象がすべて。錬金術ではそう教えてますもの」

　そうだね、とディーターは相づちをうった。

「そこがおまえのすごいところであり、また弱点でもある」

「弱点？」

「人の気持ちを汲むことが、ちょっぴり……いや、結構苦手ということだ」

「そんなこと」

　する必要が無い、と言いかけて黙ってしまう。今まではそうだった。人の気持ちをおもんばかることなど必要ない。自分が上に立ち、人々を使えばいいだけなのだから。そう思っていた。だが、今困っているのは、その人の気持ちに関するところではないか。

「ベル。いまおまえの目の前に横たわっている問題は、シンプルだ」

　シンプル。そうなのだろうか。自分にとっては、エリィの心というまるで分からないパズルを目の前にしている気分なのに。

「おまえは今日、大好きで大事なお友達を泣かせてしまった」

「――あ」

「目の前に現れた事象がすべて、だ。おまえが錬金術師なら、起きた事象から目を背けてはいけない」

　そうだったのだ。難しく、いろいろ考えすぎていたが、シンプルなことだったのだ。

　自分はエリィが大好きで、大切で。

　でもそのかけがえのない人を、傷つけてしまった。

　そのことにすら考えがいたらないほど、自分は混乱していたのだ。

「……そう、ですわね」

　娘がゆっくりとうなずくのを見て、ディーターは頬を緩めた。

　天才と呼んでも差し支えない才能の持ち主だが、この子に友達と、しかも親友と呼べる相手が出来るのだろうかと、内心密かに心配していたのだ。親友は、時に師よりも多くのことを教えてくれる存在であり、よき親友は、自分をより高みへと上らせてくれる。愛娘に、そんな存在が出来たことがとてもうれしかった。もちろん、それが現市長の孫娘というあたりの、政治的に『使える』意味合いも含めてだが。

「お父様、ありがとう」

「なんの。娘から友達の相談を受ける日が来るなんて、感無量だよ」

　マリアベルの心からの言葉に、ディーターは少し茶目っ気を出して答えた。

「ではわたしは、どうやってエリィに謝意を伝えたらよいのか考えに考え抜きますわ。なので、出て行ってくださいまし」

え、とディーターが言っている間に、マリアベルは手元に紙とペンを引き寄せ、何かメモをはじめた。彼女なりの作戦を立てるつもりなのだろう。

　そんな様子を見て、やはりうちの娘はちょっと違う、と苦笑するのだった。

同じ頃。

　エリィもヘンリーと、応接室の一角で、今日のことについて話をしていた。

　こちらもクロイス家と同じようなもので、まったく食事が手に付かないエリィを見て、ヘンリーが声をかけた、というものだった。

「……なるほど」

　エリィからだいたいの事情を聞いたヘンリーはうなずいた。

　テーブルの上には温かな紅茶がたっぷりと入ったポットが置かれていて、それをゆっくりとヘンリーが手元のカップに注ぐ。カップを口元に近づけ、香りを堪能し、口で味わう。ゆったりとした動作の中で、ヘンリーはどう話そうか、思案しているようだった。

エリィは、マリアベルに手を上げたことをまず怒られるのだろう、と予想していた。だが、ヘンリーが口にしたのは、そのことではなかった。

「おまえは、小さい頃からおとなしくて、どこか大人たちの空気を読むところがあった」

「えっ」

「それは、我が家が政治家一家だから、仕方のない面もある。だが、子供らしさに欠けている、と感じていたのも事実だ」

突然そんなことを言われ、エリィは戸惑う。今日はやたら戸惑う日だ、と思った。

「そんなおまえが、最近とても活動的になった。日曜学校にまた通いだし、友達と買い物に出かけるようになった。なにより……また、笑うようになった」

そんなに自分は笑っていなかったのだろうか。だが、マリアベルとつきあうようになってから、自然と笑顔がこぼれるようになったのは事実だ。

「マリアベルさんは、彼女はいい子だ。利発だし、活動的だ。いまのおまえには、ぴったりの友人だと思う」

「はい」

そうなのだ。マリアベルはいい子だ。それは、親友である自分が一番よく分かっている。

「なにより彼女は、自分の気持ちに嘘をつかない。好きなものは好きと言い、嫌なものは嫌だとはっきり言う。あそこまできっぱりとした物言いが出来る人は、そういない」

確かに、彼女が好き嫌いを口にしても、エリィは苦笑こそすれ、嫌悪感を感じることはなかった。それは、彼女が本心から言っていることだからだ。

「さらに言えば、それをしてもなお皆に好かれる、愛嬌があることも素晴らしいが……おっと、話がそれたな」

そう言ってヘンリーは、飲んでいた紅茶のカップをテーブルの上に置いた。

「ともかく、彼女の言動は、彼女が心から思っていることだ。……それが例え、お前にとって耳の痛い言葉であっても」

エリィは黙ってうなずいた。そうなのだ。マリアベルにとって、人の心とは移ろうもの。それは本心からの言葉なのだ。

聡明すぎる彼女は、パーティーの中で取り巻きに囲まれながら気づいていた。自分に取り入ろうとする子供達と、その後ろにいる親達の嘘に。人の心は嘘偽りと心変わりで出来ていると彼女は達観してしまっていたのだ。

「政治家をやっていると、つくづく思う。人は、聞きたい言葉しか聞かない。自分にとって都合のよいことを言う政治家を、人は『よい政治家』などと褒めそやすものだ」

そう、あの時エリィが聞きたかった言葉は、

『大変でしたわね』『かわいそうなエリィ』『元気を出してくださいな』

そんな言葉だった。だが、マリアベルから出てきた言葉は違った。両親のことを否定されて怒ったのは事実だが、後から考えれば、マリアベルが欲しい言葉をくれなかったのも、怒った原因のひとつなのかもしれない。

ただ同情されたがっていただけなんて。そう思って、エリィは少し自虐的な気持ちになり、そして自分の勝手さに自己嫌悪した。

うつむいてしまった孫娘に、ヘンリーは優しく声をかける。

「マリアベルさんの言動に、嘘はない」

ヘンリーは先ほど言った言葉を繰り返し、続けた。

「彼女が、おまえのことを心から想い、はげまそうとしたのも、また本当なのだ」

そうなのだ。エリィのことを常に心配しつづけ、話してほしいと頼んできたのもマリアベルだった。それは興味本位などでなく、本心からエリィを助けたいと願っていたからだ。

そんな風に考えていたら、胸の奥が熱く、ギュッとなった。こんな気持ちをどうすればいいのか、まだ子供のエリィは知らなかった。

「……おじいさま、わたし」

「大丈夫」

孫娘のそんな気持ちを表情だけで読み取ったのか、ヘンリーは微笑む。

「今ごろマリアベルさんも、おまえと同じように悩んでいるはずだ。それが、友達というものだよ」

「はい」

ヘンリーの笑顔にうなずき返して、エリィは紅茶を飲んだ。紅茶が身体を温めてくれるのを感じながら、エリィはどうやってマリアベルに謝ろうか、考えていた。

結局、エリィとマリアベルはお互いに会うこともなく、次の日曜学校の日が来てしまった。

エリィは謝ろうと思ったものの、やはり叩いてしまったことがどうにも気まずく、なかなか連絡が取れなかった。それに、おじいさまはああ言ってくれたが、マリアベルはもう自分のことを友達と思っていないかもしれない。それを確かめるのが怖く、今日までずるずると来てしまった。

エリィは玄関のドアに手をかけ、決意をする。

「……今日、話をしよう」

マリアベルが日曜学校に来ていたのなら、そこで。来ていなかったなら、押しかけてでも。なんにせよ、これ以上引き延ばしても、いいことはないと思ったのだ。

よし、と小さくうなずき、家を出る。門を出ようとしたところで、見慣れた金髪の後ろ髪が目に飛び込んで来た。

「ベル……」
　その声に、通りをぼーっと眺めていたマリアベルがビクリと反応する。おずおずと振り返り、エリィの顔を不安そうに見つめた。
「エリィ……」
　ここに来てくれたということは、仲直りするつもりがあるのだろうか？　それとも、絶交を言いに？　とにかく、話をしなければ――
「ごめんなさいっ！」
　往来であることを忘れてしまったかのようなマリアベルの大声が、あたりに響いた。一瞬、何が起きたのかわからず、ぽかんとしてしまう。
「本当にごめんなさいエリィ。わたし、とんでもないことをしてしまいましたわ」
　そう言って深々と頭を下げる。
　マリアベルが、エリィに謝意を伝えようと考えに考え抜いた作戦の結果がこれだった。
　手紙や、仲直りのプレゼントも考えたが、自分の気持ちを素直に伝えるためには、余計なことなどしてる場合ではなかった。シンプルに、気持ちを伝えることが大事なのだとマリアベルは結論づけた。
　頭を下げたマリアベルに、エリィが近づく。そしてそのまま、彼女の手を取った。
「違うの、ベル。悪いのはわたしの方なの」
「エリィ……」
「わたしはただ同情されたがってただけ。本当にわたしのことを心配してくれたあなたに、あんなひどいことを」
「違いますわ！　悪いのはわたしで、エリィは何も」
「ううん、悪いのはわたしなの。本当にごめんなさい」
　そう言ってエリィも頭を下げる。その下げた顔を覗き込むように、マリアベルが話しかけた。
「顔をあげてくださいエリィ。あなたにそんな顔をさせたくて、謝っているわけじゃありませんのに」
　そう言ってるマリアベルの顔も、相当に辛そうだ。
「……ベル、怒ってないの？」
「怒る？　どうしてわたしが怒らないといけないんですの？　それよりもエリィです」
「わたし？」
「わたしが言ったことは、ぶたれて当然ですもの。まだ怒ってるんじゃないかと思って、今日はいくら叩かれても仕方がない、という覚悟でまいりましたわ」
「そんな、わたしは」
　そこでふたりはお互いに顔を見合わせた。
「……もしかして」

「仲直り……ということで、よろしいのかしら？」
　しばらく見つめ合っていたふたりだが、先にエリィがフッと笑った。
「あぁ、なんだ、そうだったのね」
　仲直りしたかったのは、自分だけじゃないんだ。そう思って、こわばっていた心が、一気にほどけていく。
　と、マリアベルが驚く。
「エリィ、あなた……」
「え」
　そう言って、頬に手を当てる。そこに流れていたのは、
「涙……？」
　自分でもなぜだか分からないまま、瞳をぬぐう。そして、ぬぐいながら気づいた。
　わたしは、辛かったんだ。
　両親がいなくなったのも、その気持ちを大事な友達に分かってもらえなかったのも。
　そしてなにより、大事な友達を失ってしまったと思ったことが。
　ああ、そうか、とストンと腑に落ち、そしてまた涙があふれてきた。
「エリィ、あの！」
　慌てふためいたマリアベルの声だけが聞こえるが、涙で前が見えない。
「大丈夫、大丈夫なの」
　そう言いながら、涙を手でぬぐい。ようやく目が開けられるようになった。
「ごめんなさい、本当に……」
　そう言って顔を上げる。そこには、自分を心配そうに見つめているマリアベルがいた。
　と、そこでエリィは違和感に気づく。彼女はいつものように、美しい金髪に、紅潮した頬と、極彩色の世界にいた。だが今日は、彼女だけではない。
　エリィの家の門も、立ち並ぶ家々の屋根も、花壇に咲く花も、抜けるような青空も、すべてが色を取り戻していた。
　言葉を止めてしまった自分を不安そうに見つめるマリアベルに向かって言う。
「戻ってる……」
「え？」
「色が、戻ってる」
　最初、何を言っているのかわからなかったマリアベルだが、すぐにその意味を理解した。
「本当ですの!?」
「ええ。だってほら」
　そう言って、花壇に咲く花を指差す。



「この花の色、今日のベルのお洋服と同じ。すごくかわいらしいピンク」

マリアベルは花壇に咲く花と自分の洋服を見比べた後、いきなりエリィに抱きついた。

「ちょ、ちょっとベル!?」

「よかった～～！　ほんっとうに、よかったですわっ!!」

そう言って、ぎゅっとエリィを抱きしめる。少し痛い、と言おうとしてエリィは、親友の目に光るものを見つけて、その言葉を飲み込んだ。そして代わりに、自分も負けないぐらい、強く強く、抱きしめた。

「さ、まいりましょう、エリィ！」

そう言ってエリィの腕に自然と自分の腕を絡めるベル。エリィはいつものような少し困った表情をせず、それをすんなりと受け入れた。

「ええ、行きましょうか、ベル」

ふたりはいつものように、日曜学校への道のりを歩き出した。

「そういえば」

話しだしたマリアベルの横顔を覗き込むエリィ。

「ひとつ、訂正しなくてはいけないことがありますの」

「なに？」

「人の心は移ろう、と言いましたけど、移ろわないものもありますわよね」

「そんな」

自分のことをおもんばかって、そんなことを言い出したのだろうか、とエリィは思ったが、次の瞬間、その考えが甘いことを思い知った。

「人の気持ちが永遠じゃないとしたら、わたしがエリィを想う気持ちすら、永遠でなくなってしまいますわ。そんなの、間違ってます！」

え、という声にならない声をあげたエリィの腕に、ぎゅっと自分の身体ごと密着させるマリアベル。

「わたしの愛は永遠でしてよ、エリィ～！」

そう言いながら、さりげなくエリィの手に自分の手を絡ませ、あまつさえ空いている方の手で腰まで抱いてきた。

「ちょ、ちょっとベル！」

マリアベルの満面の笑みを見てエリィは、自分で親友と選んだものの、本当にこの人で良かったのだろうか、と今さらながら不安になった。

エリィの章（後編）　了

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！

Falcom SPECIAL BOX'94 ～ YsⅣ SUPER ARRANGE VERSION ～



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

皆様こんにちは！ Ysの新作の発売日は国民の休日に指定すべきだと思って止まないJdkBANDドラマーのオカジです。いきなりなんのこっちゃ!? という出だしでスミマセン。

だって、セルセタの樹海が発売されたんですよ!? オールドユーザーの僕からすれば、あのYsⅣをファルコムが公式で作ってしまったようなものなのです。これはとんでもない事件なんですよ…！ しかも今回は色々と携わらせて頂いてしまったりもしたものだから、どんな完成になっているのかとワクワクしながら期待に胸を膨らませつつ発売を待っておりました。

僕はPS Vitaは持っていなかったのですが、勿論セルセタをプレイしたいがために購入。プレイ開始からおよそ30時間弱。クリアし、エンディングを見るまでの間は、現世を離れ樹海を旅する冒険家に転職しておりました。

セルセタをプレイするための下準備としてCD-ROM²版YsⅣをクリアしていた僕としては、様々なキャラクター、世界観の変化や違いなどにもニヤニヤしちゃったりして…何より、レオ団長…本当に良いキャラに出世できて良かったね…！ まさかセルセタであんなに活躍する人物になっていようとは思いもよらなかったよ…。

さてさて今日はそんなセルセタまみれになっているワタクシが是非とも皆様にお奨めしたい一枚をば！ ドドン！



「Falcom SPECIAL BOX'94 DISC1 YsⅣ SUPER ARRANGE VERSION」

これはFalcomSPECIAL BOX'94という3枚組みの豪華なアルバムの中の一枚で、当時新発売だったYsⅣの楽曲のアレンジバージョンが収録されているのですが、今セルセタの樹海をクリアした後改めて聴いてみるとまた新鮮です。辺境都市キャスナンの曲が「プロマロック」としてやたらとオシャレにアレンジされていたり、レオ団長のテーマ曲の原点である「ロムン帝国」のアレンジも、セルセタの樹海のレオ団長をイメージしていると、ビックリするようなアレンジかと思います。また音色の雰囲気こそ違えど、曲そのもののもつイメージは当時から変わっていない「古代の伝承」や「バトル#58」等など、比較しながら聴いてみるのも一興かと思います。なにより、今から20年近く前に、たった今新作として皆さんがプレイしているゲームのアルバムが沢山リリースされていたと思うとなんだか不思議な気分になりませんか？ 勿論、YsⅣのアレンジアルバムはこのSPECIAL BOX'94以外にも沢山リリースされています。そんな作品を今遡って行く事で改めて、セルセタの樹海という作品を深く知ることも出来るのではないでしょうか。何より、CD-ROM²版YsⅣもPSストアのPCエンジンアーカイブでダウンロード購入すれば、たった800円でPS Vitaでもプレイできてしまいます。

そう、今、セルセタの樹海をプレイしてハマッてしまった貴方には、クリア後さらなる楽しいクエストが待っているのです。約20年前の世界に遡る事で、セルセタの樹海というゲームの奥深さを改めて発見できるに違いありません。

さぁ、貴方の知らない、失われしセルセタの樹海の記憶を求めて、過去を遡る冒険に出てみてはいかがでしょうか。…そう、アドルが失われし記憶を求めて樹海を冒険したかのように。

それではまた次回お会いしましょう！

ファルコム楽曲4,000曲をiTunesで世界50ヶ国以上に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

iTunes配信中のコラム関連アルバム情報
[Falcom SPECIAL BOX'94]
価格：4,500円
※曲単体での価格は200円／曲となります
収録曲数：31曲

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.



2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

第50回-第51回　茅野愛衣（『那由多の軌跡』ノイ役）

50-51回のゲストは、『那由多の軌跡』でノイ役を演じた茅野愛衣さんが出演。パーソナリティの水橋かおりさん演じる主人公・ナユタのパートナーとしして活躍するキャラクターということで、水橋さんのテンションも終始上がりっぱなしの収録となった。また、オープニングでは、ファルコムラジオが一周年を迎えたことに触れ、水橋さん、小寺かな子さん、支援課見習いのしおりん、ガチくんの４人で、この一年を振り返る一幕も見られた。

▶第50回-第51回の舞台裏◀

51回冒頭でおふたりがモグモグしていたが、実はこの時の差し入れは松茸おこわ。初秋の豪華な差し入れということでスタジオ内のテンションは最高潮に。ラジオという音だけのメディアにも関わらず、自由に食べ物を食べられるフリーダムな現場になっているのだ！

第52回-第53回　小倉唯（『イース セルセタの樹海』カンリリカ役）

52回、53回のゲストは、発売されたばかりの最新作『イース セルセタの樹海』からのゲストとなる、カンリリカ役の小倉唯さん。現役女子高生の小倉さんが制服姿で収録に訪れたということもあり（?）、パーソナリティの水橋さん、小寺さんも女子高生モードで収録することに。そんなキャピキャピした雰囲気の中の収録とはなったが、その一方で水橋さんが小倉さんに、人生の先輩らしいアドバイスを送るシーンが印象的だった。

▶第52回-第53回の舞台裏◀

ゲストの小倉さんが多いときは一日３袋食べてしまうほど大好物と言っていた味覚糖ののど飴。実はファルコムラジオスタッフ内でも、春先に一度のど飴ブームが起こっていたのだ。その時ののど飴はカンロのボイスケアのど飴。一度試してみてはいかが？





今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. / chara-ani

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

キュートなヒロインが勢ぞろい！

碧の軌跡ラバーストラップvol.3



『英雄伝説 碧の軌跡』から、デフォルメされた可愛らしいキャラクターたちのラバーストラップの第三弾が登場。今回はなんと、ミシュラムのビーチでお披露目されたヒロインたちのキュートな水着姿のイラストがラインナップされている。特務支援課の他、リーシャやノエル、シュリなどお気に入りのキャラクターをゲットしよう！全9種、10月26日発売。各600円（税込）。

デコで写真がさらに楽しく！

英雄伝説 零の軌跡フォトデコレーションアプリ



BIGLOBEより『英雄伝説 零の軌跡』の特務支援課ほか13の人気キャラクターで写真をデコレーションできるスマートフォン向けアプリが発売中。イラストを使用したフレームや、デフォルメされたキャラクターのスタンプなどが搭載されている。また『碧の軌跡』verも同じく好評発売中だ。App Storeにて発売、iPhone向け。350円（税込）。

音楽でアドルの新たな冒険が始まる

イース セルセタの樹海 オリジナルサウンドトラック



「イース」シリーズ生誕25周年記念作品である『イース セルセタの樹海』のオリジナルサウンドトラックがついに登場。CD2枚組みで全36曲、収録時間約120分に渡る怒涛のサウンドでアドルたちの冒険の名シーンを振り返ろう。また、ボーナストラックのフルバージョンで収録されたOP曲も見逃せない。11月9日発売。2625円（税込）。

美麗なイラストが月ごとに登場！

イースシリーズ2012壁掛けカレンダー



最新作『イース セルセタの樹海』も発売された、日本ファルコムの大人気シリーズ「イース」の歴代イラストを使用した壁掛けカレンダーが発売決定。イラストとカレンダー部分が切り離せるため、コレクションアイテムとしても使える仕上がりとなっている。現在、予約受付中で詳細は公式HP（http://dezaegg.com/deza-skin.php）まで。DEZAEGGより発売。2100円（税込）。

©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.　©2012 DEZAEGG

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

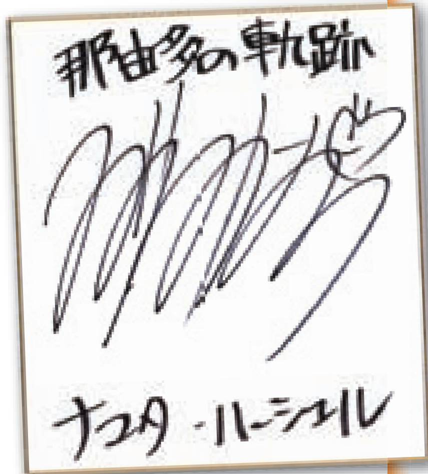


① 1名様

❶空の軌跡外伝 レーヴェ物語 ２巻
ファルコムマガジンで大好評連載中、人気キャラクター・《剣帝》レーヴェの過去を描いたコミックス第２巻。今回は描き下ろしのエピソードも収録！

② 1名様

❷『那由多の軌跡』
ナユタ役 水橋かおりさん
サイン色紙
絶賛発売中の『那由多の軌跡』の主人公・ナユタを演じる我らがファルコムファン、水橋かおりさんのサイン色紙。





③ 1名様

❸ちびみっしぃぐるみ
キュートなみっしぃのぬいぐるみを再び入手！　このチャンスを逃すともう手に入らないかも!?

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●「vol.21プレゼント係」とご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.21プレゼント係
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
◆
面白い：
つまらない：
◆
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
◆
1

【記事一覧】
1：『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：英雄伝説 空の軌跡
　リベール王国スナップショット
4：零の軌跡ショートストーリーズ
5：jdkバンドドラマー・オカジの
　人生半キャラずらし
6：ティオのファルコムラジオ
　めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
7：FalcomFanArt Collection
8：ファルコムニュース

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp 応募締め切り **11月26日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々の
イラストとコメントを毎月お届けします！



じょうさん

『空』に引き続き、零の軌跡も魅力溢れるキャラクター達ばかりでプレイし出すとなかなか止められません。絆イベントはドキドキものでした。

『英雄伝説 零の軌跡』(2010)

『英雄伝説 空の軌跡』に続く「軌跡」シリーズ２作目。巨大な都市でそれぞれ想いを秘めて戦う若者たちの物語を描いており、2011年には日本ゲーム大賞の年間作品部門で優秀賞を受賞している。

©Nihon Falcom Corporation. All Rights Reserved.



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.21

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

Copyright	©Nihon Falcom Corporation.All rights reserved. ©2012 FIELD-Y ©MIYABI HASEGAWA 2012 ©TARAHI RAKUJI 2012 ©DAISUKE ARAKUBO 2012 ©DAISUKE TAZAWA,MATSURYU 2012

日本ファルコム(株)のライセンス許諾商品です。